

信濃町の埋蔵文化財

上山桑 A 遺跡

発掘調査報告書

—信濃町の縄文早期・沈線文系土器の遺跡—

上山桑
A 遺跡
発掘調査報告書



2004

長野県信濃町教育委員会

上山桑 A 遺跡

発掘調査報告書

—信濃町の縄文早期・沈線文系土器の遺跡—

2004

長野県信濃町教育委員会

目 次

目 次	
例 言	
I 調査の経過	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査体制	1
3 調査経過	2
4 調査方法	6
1) 調査区の設定と発掘方法	6
2) グリッドの設定と呼称法	6
II 遺跡の環境	6
1 地質・地理的環境	6
2 歴史的環境	7
III 発掘地の状況と調査の概要	8
1 発掘地の状況	8
2 遺跡の地質層序	11
3 遺物の出土状況	11
IV 繩文土器	13
1 繩文時代早期、沈線文系土器	13
A 沈線文系土器 I	13
B 沈線文系土器 2	13
C 沈線文系土器 3	13
2 繩文時代早期、条痕文系土器	26
A 鶴ヶ島台式併行の土器 1	26
B 鶴ヶ島台式併行の土器 2	26
C その他の沈線文系土器	26
3 繩文時代前期、諸磯 b 式併行土器	26
4 繩文時代前期末の土器	26
5 上山桑 A 遺跡における縄文土器の分布 と変遷	27
V 石器	27
VI 平安時代の遺物	33
1 出土状況	33
2 遺物	33
3 所属時期	34
VII 信濃町の沈線文系土器	35
1 信濃町の沈線文系土器の種類	35
2 信濃町沈線文系土器の区分と編年	35
3 沈線文系土器 I 群をめぐって	36
4 沈線文系土器 II 群について	36
5 2 d 種、 2 e 種土器について	37
6 沈線文系土器群の確認の意義	37
VIII 沈線文系土器群の胎土研究による分析と検討	41
1 土器胎土研究法	41
2 沈線文系土器群の胎土の特徴	41
3 押型文土器群の胎土と沈線文系土器群の関係	43
IX まとめ	46
文献	47
写真図版	48
英文要旨	61
報告書抄録	62

例　　言

1. 本書は平成10年度一般県道杉の沢黒姫（停）線道路改良工事にかかる上山桑A遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、長野建設事務所から委託をうけた信濃町教育委員会が、平成10年5月11日から平成10年10月23日にかけて実施した。
整理作業は、平成10年5月よりはじめ、平成12年3月20日までにおこなった。
報告書の作成のための作業は、平成16年2月29日までにおこなった。
3. 本書は、調査によって確認された遺物とその出土状況を中心に、基礎資料を提示することに重点をおいた。
4. 本書の編集・執筆は、中村由克がおこなった。編集にあたっては、佐藤ユミ子、今井美枝子、長谷川悦子の補助をうけた。
5. 調査によってえられた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。
出土資料の注記番号は、次のとおりである。

上山桑A遺跡	98K-YA
--------	--------
6. 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏にご指導・ご援助いただいた。記して謝意を表する次第である（敬称略）。
縄文土器：中沢道彦、小笠原永隆
英文校閲：Andren David Eliot（信濃中学校）、
川端結花

I 調査の経過

1 調査にいたる経過

一般県道杉の沢黒姫（停）線は信濃町大字柏原より新潟県中頸城郡妙高高原町大字杉の沢にいたる県道である。平成10年度に、信濃町大字山桑地内において、道路改良工事が計画された。

平成9年9月24日には、長野建設事務所と長野県教育委員会文化課、信濃町教育委員会の3者で、道路改良工事にあたっての遺跡保護協議をおこなった。発掘調査は、平成10年度から信濃町教育委員会がおこなうことなどが話し合われた。平成10年1月16日には、長野建設事務所長より文化庁長官あてに、埋蔵文化財発掘調査の通知がされた。

平成10年5月1日付で長野建設事務所と信濃町が平成10年度埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。信濃町教育委員会では、ただちに発掘調査の準備に着手

し、5月11日には道路部分の発掘調査を開始した。同年10月23日にはすべての現場作業を終了した。

平成10年度は、信濃町においては高速道のあと、周辺道路網の整備などによる公共事業や民間事業があいつぎ、町教育委員会が担当する埋蔵文化財の発掘調査はひきつづき膨大な量を抱えていた時期であった。このため、信濃町教育委員会では長野県教育委員会文化課の指導のもと、現地における埋蔵文化財調査を最優先し、整理事業を次年度以降に送る方針をとり、なんとか上山桑A遺跡をはじめとする遺跡調査を遂行することができた。

整理作業は、平成10年度から冬期間にすすめられたが、本格的に着手したのは、平成11年度である。

2 調査体制

上山桑A遺跡の県道用地内の発掘調査は、信濃町教育委員会の直営事業とし、組織は以下のとおりである。

発掘調査（平成10年度）

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 小林 一盛

事務局 総務教育課 課長 北村 敦博

係長 北村 恭一

係 池田 昭博

調査担当者 中村 由克

担当職員 池田 昭博

調査参加者

青柳 成子 麻田 紀子 池田か己子

今井美枝子 小日向キヨ子 萩原 敬藏

落合 春人 片山 トヨ 金子シズイ

金子 房江 木村キミ子 北村フクコ

駒村 幸男 小林 正義 小林 栄子

佐藤 清子 佐藤 道子 佐藤美佐江

佐藤ユミ子 佐藤 義信 渋沢ユキ子

関塚 恒 高橋 是清 竹内ユキ子

長谷川悦子 万場 弘美 東 貴

平塙せつ子 深沢 政雄 卷柄 恵子

松岡さとみ 松木由美子 油井 京子

吉川 栄子

遺跡測量業務 (有)写真測図研究所

調査協力 徳脇 静雄

整理作業・報告書作成 (平成11年～15年度)

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 小林 一盛 (～11年1月)

小林 豊雄 (11年2月～)

事務局 総務教育課 課長 北村 敦博 (～12年3月)

佐藤謙一郎 (12年4月～)

係長 北村 恭一 (～13年3月)

丸山佳代子

(13年4月～15年3月)

羽入田千恵子 (15年4月～)

係 池田 昭博 (～12年3月)

文化財担当者 渡辺 哲也（12年4月～）
 調査担当者 中村 由克
 整理作業参加者
 佐藤ユミ子（土器、石器実測、図版作成、叢書補助）
 今井美枝子（土器、石器、トレース、図版作成）
 長谷川悦子（土器、石器、図版作成）
 万場 弘美（土器、石器）
 横山真理子（土器、石器）

発掘調査、整理、報告書作成では、例言でお名前をあげた方のほか、次の方々より多大なご指導、ご援助をいただいた（敬称略）。

石塚二子侍、小熊博史、近藤和子、佐藤雅一、張龍俊、鶴田典昭、中島英子、中村敦子、深澤哲治、渡辺哲也

3 調査経過

平成10年度

5月11日 上山桑A遺跡の道路部分（南1・2区）の試掘調査 表土剥ぎ開始
 5月13日 上山桑A遺跡の道路部分南部（南2区）の表土剥ぎ開始
 5月14日 発掘調査の現場設置
 5月26日 発掘調査の開始、縄文時代の遺物確認
 6月1日 北部の山林部分（北地区）の全面的な発掘に着手
 6月8日 測量作業開始、基準点設置
 6月9日 平安時代の土器集中地点を確認（南2区）

6月16日 グリッド設定、5m×5mの杭打ち
 6月17日 遺物の測量開始
 6月26日 クマが出没したとの情報があり、クマ対策をこうじる
 7月8日 夏季の暑さ対策をこうじる
 7月～8月 この夏は雨天の日が多く、作業難航
 8月8日 野尻湖人類考古グループの見学
 8月12日 お盆休みに入るので、現場管理の対策をとる
 9月2日 発掘作業は大部分、終了
 9月3日 作業員移動、調査終了、遺跡引渡し
 10月23日 工事中に電柱部分の補足発掘作業

表1 平成10（1998）年度 信濃町内遺跡の発掘調査一覧

No	遺跡名	原因	遺跡の時代	面積	調査期間	出土遺物点数	主な成果
1	西岡A	道の駅	旧石器・縄文	800m ²	4/10～4/20	10数点	側片が少し出土したが、道路の中心からはずれていたと思われる。
2	上ノ原（7次）	町道 大久保大平線	旧石器・縄文	300m ²	10/2～11/6 12/3	83点	木彫形尖頭器、側片、石核が出土。
3	針ノ木	町道 柏原水穴線	旧石器・縄文・平安	1,800m ²	9/3～11/10 12/14	2,527点	平安時代の土器が多く出土。縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土。
4	上山桑A	県道 杉原沢黒郷（停）	旧石器・縄文・平安	2,000m ²	5/11～9/2 10/23	1,459点	縄文早期の沈綱文系土器が出土。 約7,000年前ごろ。
5	野尻一里塙	国道18号線 バイパス	近世	200m ²	12/10～ 12/17～	0点	一里塙をつくった時の土の横ね方を調査。道路の一部も出土。
6	丸谷地	えのき工場	縄文・平安	900m ²	11/11～12/16	9,482点	縄文早期の押型文土器と表裏綱文土器が大量に出土。平安時代の墓を確認。住居址土軒を調査。
7	丸谷地	えのき工場	縄文・平安	19,809m ²	10/13～10/22	130点	町道ぞいに分布する遺跡のひみがりを確認。
8	大久保南 (個人住宅)	個人住宅	旧石器・縄文	450m ²	4/10～5/27	799点	旧石器の石器集中区を2か所確認。約2.7万年前の黒曜石製のナイフ形石器など石刃主体の石器群が出土。
9	東裏 (試掘)	信越病院	平安	125m ²	10/29	2点	遺跡の中心からはずれる。
10	大久保A (試掘)	埋立て地	旧石器 縄文・平安	700m ²	11/9～11/12	26点	平安時代などの土器が出土。有茎尖頭器が出土。
11	上ノ原 (個人車庫)	個人車庫	旧石器	30m ²	5/7	0点	遺跡にかからない。

表2 野尻湖周辺遺跡調査一覧

年 度	野尻湖の発掘	信濃町内の発掘	高遠道関連の発掘	おもなできごと
1948(昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953(昭28)	杉久保道路の石器、旧石器と判明			
1958(昭33)	仁之倉遺跡（問題）			
1962(昭37)	古野尻湖発掘始まる 第1次野尻湖発掘	杉久保道路		ナウマンゾウ、オオツノゾカ化石を見
1963(昭38)	第2次野尻湖発掘	伊勢見山遺跡（国学院大学） 杉久保道路		野尻湖発掘、C14年代測定と花粉分析によるウルム水期の確認
1964(昭39)	第3次野尻湖発掘	杉久保道路		はじめて石器（断片）を見
1965(昭40)	第4次野尻湖発掘	杉久保道路 琵琶島遺跡		ナウマンゾウの頭骨の一部を見
1966(昭41)		杉久保道路（駐車場）		
1967(昭42)		杉久保道路（町道）		
1973(昭48)	第5次野尻湖発掘			「月と星」の発見
1974(昭49)	74年3月湖底調査 74年10月仲町調査			
1975(昭50)	第6次野尻湖発掘			ヴィーナス像（？）の発見
1976(昭51)	第1回陸上発掘（仲町）			
1977(昭52)		仲町（木道工事）		
1978(昭53)	第7次野尻湖発掘			ナウマンゾウの頭骨を見
1979(昭54)	第2回陸上発掘（仲町）			黒姫駅でナウマンゾウの歯を見 仲町道路で櫛文瓦中期の土坑発掘 台形状のナイフ形石器発見
1981(昭56)	第8次野尻湖発掘			【ヤリ状木器】、骨製スクレイパーの発見 2.4mのナウマンゾウの牙見
1982(昭57)	第3回陸上発掘（仲町、 向新田）			隆線文土器の発見
1984(昭59)	第9次野尻湖発掘			キルサイトの確認
1985(昭60)	第4回陸上発掘（仲町、 向新田、照月台、貴ノ木）	大久保南道路（土取り）		向新田道路で櫛文石器文化確認
1987(昭62)	第10次野尻湖発掘			骨製クリーヴァー発見
1988(昭63)	第5回陸上発掘（貴ノ木）			鹿群と配石を伴う生活面を確認
1989(平1)		古町教育委員会の調査始まる 丸谷地道路（町道） 大谷下道路（町道）		丸谷地道路で平安時代の住居跡を発掘 灰釉陶器、鍾などが出土
1990(平2)	第11次野尻湖発掘	大道下道路（会社事務所） 上ノ原道路（開拓） 杉久保道路（町営トイレ） 一里塚道路（町道） 丸谷地道路（町道）		第11次発掘でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原道路で5基が並んだ石圍炉を発見
1991(平3)	第6回陸上発見	貴ノ木道路（保養所） 大道下道路（土取り） 丸谷地道路（資材置場） 赤川道路（国道18号）		陸上発掘でナウマンゾウの化石見
1992(平4)		貴ノ木道路（保養所） 東義道路（町道） 役屋敷道路（店舗） 赤川道路（国道18号） 止屋道路（工場）		貴ノ木道路で局部遮蔽石斧4点や特殊な尖頭器を見
1993(平5)	第12次野尻湖発掘	東義道路（特別養護老人ホーム） 東義道路（宅地造成） 上ノ原道路（町道） 毛無道路（町道） 西向林B道路（宅地造成） 七ツ栗道路（県道）	立高道建設に伴う発掘調査始まる 日向林B道路 七ツ栗道路 東義道路 貴ノ木道路 昔光田道路	日向林B道路で石斧41点出土 上ノ原道路で杉久保型ナイフ形石器多数出土 東義道路（町） 潟戸内系の石器群が出土 東義道路（県）で「削片尖頭器」出土
1994(平6)	第7回陸上発掘	東義道路（町道） 七ツ栗道路（県道） 日向林B道路（宅地） 貴ノ木道路（宅地） 北ノ原B道路（町道） 山根道路（広域農道） 高山道路（ゴルフ場） 市道道路（ゴルフ場）	七ツ栗道路 日向林B道路 大平B道路 島の山道路 東義道路 上ノ原道路 貴ノ木道路 西園A道路	陸上発掘で後期旧石器時代初期の石器多発見 貴ノ木道路（県）で砾石8点出土 山根道路で弥生土器が多数出土

表3 信濃町における遺跡調査の歴史（2）

1995(平7)		大久保南道路(県道) 上ノ原道路(ガソリンスタンド) 上ノ原道路(消防署) 飛騨街道(急斜面付策) 山崩道路(広域農道) 市道道路(ゴルフ場) 清川久保道路(ゴルフ場) 上ノ原道路(県道) 上ノ原道路(宅地)	七ツ栗遺跡 日向林B遺跡 東張遺跡 大久保南道路 上ノ原道路 貢ノ木道路 西岡A遺跡 星光山荘B道路	大久保南道路(県)で黒曜石の石核がまとまって出土 市道道路で绳文土器など24,000点以上出土 星光山荘B道路で御子塚型石斧など出土 上ノ原道路(町)で、瓶戸内系の石器が多数出土
1996(平8)	仲町遺跡、立が鼻道路で地質調査	上ノ原道路(県道) 吹野原遺跡(広域農道) 山崩道路(広域農道) 大久保南道路(県道) 七ツ栗遺跡(町道) 大道下道路(埋め立て) 東裏道路(町道)	貢ノ木道路	上ノ原道路で瓶戸内系石器群が2つの地層から出土 吹野原A遺跡で磁器群出土 山根遺跡で弥生中期の住居址が出土 大道下道路で绳文早期の土器が多数出土
1997(平9)	第13次野尻湖発掘 仲町道路、立が鼻道路で地質調査	吹野原A遺跡(広域農道) 上ノ原道路(県道) 貢ノ木道路(ガスパイプ) 東裏道路(町道) 上ノ原道路(可道) 月台道路(店舗) 役屋敷道路(駐車場)		上ノ原道路で磁器と石斧薙杖がおかれた状態で出土 東裏道路で瓶戸内系の石器群が出土 照月台道路で基部加工のナイフ形石器が出土 吹野原A遺跡で大型の石核が出土
1998(平10)	第8回壁上発掘	大久保南道路(個人住宅) 上山桑A道路(県道) 新ノ木道路(河道) 丸谷地(工場)		大久保南道路で基部加工のナイフ形石器が出土 丸谷地道路で平安時代の聚落を確認、绳文早期土器が多数出土
1999(平11)		仲町(個人住宅) 吹野原A道路(広域農道) 仲町道路(国道18号) 東裏道路(町道)	古国造18号バイパスに伴う発掘 調査始まる 貢ノ木道路 照月台道路 川久保道路	照月台道路で基の可能性のある土壌を確認 吹野原A遺跡と仲町道路で石刀製石器群が出土 川久保道路で弥生土器が多数出土
2000(平12)	第14次野尻湖発掘	吹野原A道路(広域農道) 仲町道路(国道18号) 仲町道路(店舗)	仲町遺跡	仲町道路で根石刀文化の生活面、オオツノシカの足跡化石を確認、绳文草創期の土器が多数出土
2001(平13)		仲町道路(国道18号) 役屋敷道路(史跡整備)	仲町遺跡 吹野原遺跡(県道)	仲町道路でナウマンゾウの足跡化石、オオツノシカの化石が出土、石器が多数出土
2002(平14)		東裏道路(個人住宅) 役屋敷道路(史跡整備)	仲町遺跡(除雪ステーション)	東裏道路で石刀製石器群が出土 史跡小林・茶臼伝載地を調査 仲町道路でナウマンゾウ化石など出土
2003(平15)	第15次野尻湖発掘	雲仙道路(溜池池建設)		ナウマンゾウ化石の形状を詳細に調査

(野尻湖ナウマンゾウ博物館編)

図1 遺跡分布図

- 18 赤川・赤川城跡、20 大本道B、21 大本道C、22 小本道、23 野尻城跡、24 家老路城跡、25 城堀りA、26 城堀りB、
 27 桜ヶ崎、28 旧野尻湖中学校、29 杉久保、30 猫琵島、31 立が鼻、32 海端、33 川久保、34 土橋稻荷、
 35 小丸山・土橋城跡、36 向新田A、37 向新田B、38 瓢池、39 清明白、40 仲町、41 神山北、42 狐久保、43 神山A、
 44 神山B、45 神山C、46 照月台、47 貢ノ木、48 星光山荘A、49 下山桑A、50 下山桑B、51 下山桑C、52 下山桑D、
 53 駒爪、54 上山桑A、55 上山桑B、56 瑞穂A、57 瑞穂B、58 大久保A、59 大久保B、60 大久保C、61 大久保南、
 62 西岡A、63 西岡B、64 毛無、65 上ノ原、66 緑ヶ丘、67 野尻湖団地、68 小丸山公園、69 役屋敷、70 東裏、71 裕ノ山、
 72 伊勢見山、73 東裏城跡、74 茶山、75 熊倉、76 新田川、77 五輪堂、78 仁之倉A、79 仁之倉B、80 仁之倉南、
 81 長水A、82 長水B、83 鳥居川第二発電所、84 上島、85 柳原、86 一里塚、87 陣場A、88 陣場B、89 小古間、
 90 清水東、91 清水尻、92 吹野原A、95 古間支館裏、96 大平A、97 大平B、98 針ノ木、99 砂間、102 謙訪ノ原、
 103 美野里、138 北ノ原A、139 北ノ原B、140 宮原、141 丸山、142 北山道、143 御料、144 向原、145 丸谷地、
 146 大道下、147 蓼影(五厘山)、148 上の山、149 北中島、150 中島、151 売屋、152 宮ノ腰、153 富ヶ原I、154 富ヶ原II、
 157 富ヶ原V、161 繩場、162 七瀧、165 石橋、166 市道、172 星光山荘B、173 大平C

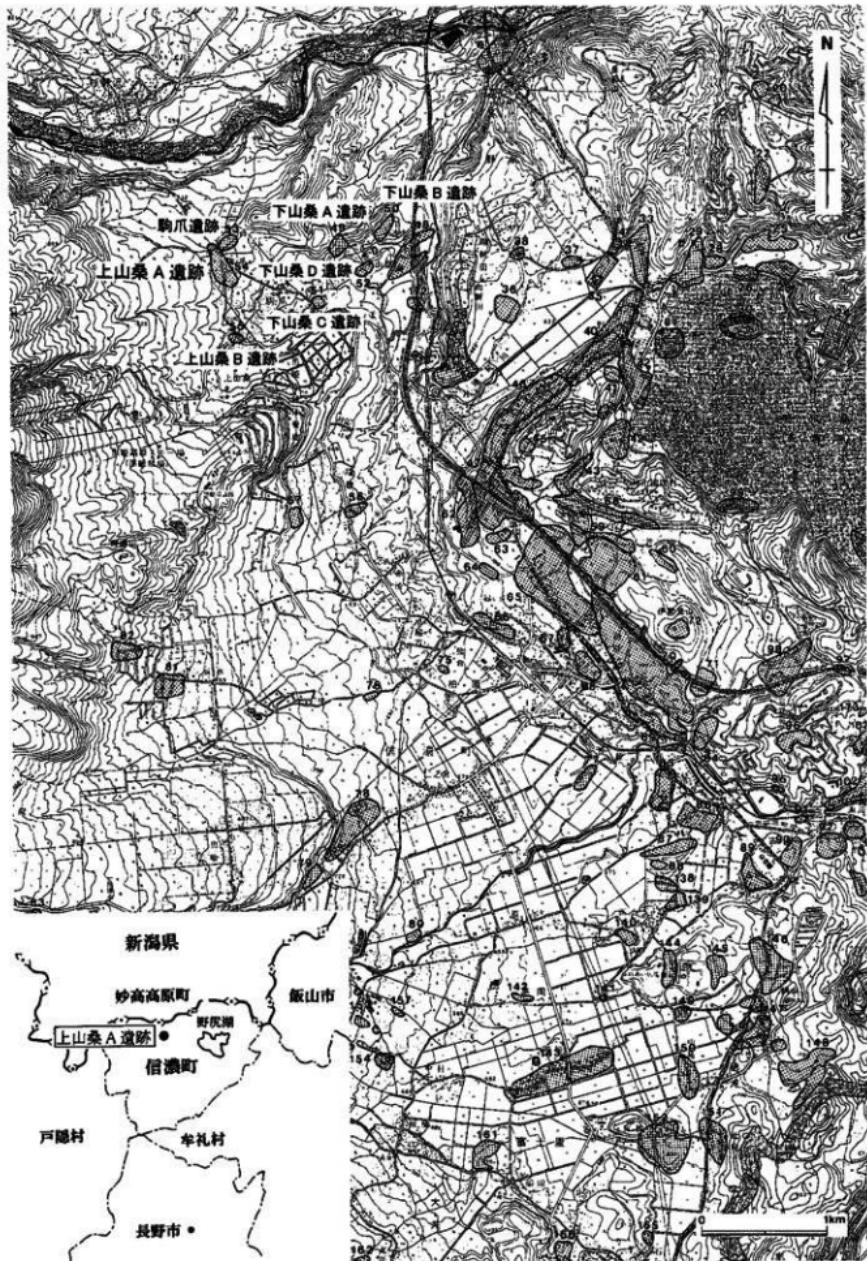


図1 上山桑 A 遺跡とまわりの遺跡

4 調査方法

1) 調査区の設定と発掘方法

最初におこなった用地内の試掘調査の結果、上山桑A遺跡の範囲内では、駒爪川ぞいの低湿地をのぞいて、高台となっている緩斜面には、遺物の散布が認められたので、ほぼ全面的に発掘対象地となった。

調査区南部の畠地となっている道路拡幅部分、(南2区)および北部の山林部分(北地区)は、遺物が多かつたので全面発掘とし、まず、約1m幅を基準に、南北、東西方向に試掘溝を手掘りで掘削した。その後、遺物の出土の有無を見ながら発掘範囲を決めていった。

駒爪川にむかう北側の急斜面部は、試掘確認をおこなうこととした。試掘確認をおこなう場所は、約1m幅を基準に、地形にそった北東-南西方向に試掘溝を手掘りで掘削した。

2) グリッドの設定と呼称法

グリッドの設定にあたっては、國家座標を基準として、長野県埋蔵文化財センターによるグリッド設定と整合性をもたせる意味で、大区分をおこなった。200m×200mを1大区画とし、さらに40m×40mの中区画に分割し、北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。さらに、40mの中区画は、5m×5mの64区画に細分し、西から東にAからH、北から南に1から8の番号を付し、「A 1」といった小区画名をつけた。

したがって、上山桑A遺跡の調査地となった場所は、I区M、N、R、S、X、II区D、E、I、Jの9区画に属する合計100グリッドである。

II 遺跡の環境

1 地質・地理的環境

信濃町は長野県北部にあり、新潟県境に接する。町域は東西に3つの地形に区分される。東部は、第三紀鮮新世～前期更新世の砂岩・泥岩などの堆積岩が分布するなどだらかな基盤山地である。これらの上位を斑尾山起源の安山岩類が被っている。野尻湖はこの基盤山地の中に位置している。

西部には、中・後期更新世の飯縄山、黒姫山の火山岩類がつくる火山地形が分布している。飯縄山の東麓から野尻湖の南方には、緩やかな地形の丘陵地がひろがる。これらの丘陵地は、上述の野尻湖のまわりの小起伏面とあわせて、鼻見面(井上、1962)ないし鼻見面群(豊野団研、1969)とされたもので、中期更新世の飯縄山・黒姫山等の火山活動以前に形成されていた侵食平坦面であると思われる。

これら東西の山地に挟まれた中央部には、水田や集落が分布する低地帯がひろがっている。丘陵は後期更新世の泥流堆積物などからなり、段丘は後期更新世の湖沼・河川堆積物からなり、低湿地は後期更新世末から完新世

にかけての湖沼・河川堆積物からなっている。

黒姫山東麓と野尻湖を源とする信濃町北部の山桑川、赤沢川、池尻川は関川水系に属し、北方に流下して上越市で日本海に注ぐ。一方、戸隠村を源とする鳥居川は、黒姫山と飯縄山の間を東に流れ、信濃町古間で南東から南に方向を変えて、疊野町で千曲川に合流する信濃川水系に属す。これら両水系の分水嶺は、信濃町柏原の低地ないし丘陵地の中に位置するため、信濃町の中央部にはなどだらかな高原地形がひろがっている。

北側の妙高高原町との境界部には、関川が流れ深い谷をつくっている。

県道杉の沢黒姫(停)線の平成10年度改良工事は、信濃町北部の山桑地区の黒姫山東麓の傾斜地に計画されたものである。おもにこの地域には、後期更新世の黒姫山起源の火山流下物が分布し、野尻ローム層などの風化火山灰層が堆積している。

2 歴史的環境

信濃町は長野県から新潟県にむける交通路に位置し、近年では北国街道や信越本線、国道18号線、上信越自動車道といった内陸側と日本海側をむすぶ主要幹線路が通過している。このような交通の要所となった背景には、黒姫山などの第四紀火山と野尻湖のまわりの基盤山地とのあいだに形成された、山間地では比較的珍しい平坦地が高原状に続く地形的特徴によるものである。このため、起伏の少ない峰越えの通路となっており、また、信州の中心地である長野盆地や上田盆地から最短距離で日本海（上越市）に通じる路線として、古くから利用されてきた。

信濃町には現在、173か所の遺跡が知られている。この大半が、信濃町中央部の低地帯と東部の基盤山地の中の丘陵上や谷沿いに分布する。これらの遺跡は、旧石器時代中期から中世・近世に至るものであるが、その時代には大きな特徴がある。

第1は、旧石器時代の遺跡が野尻湖の西部から南方の丘陵地を中心に数多く分布することである。野尻湖西岸を中心とする旧石器時代の遺跡群は、野尻湖遺跡群と呼称されている。現在までに、信濃町では約40か所の遺跡が知られている。

野尻湖立が鼻遺跡は、中期旧石器時代末の約4.8～3.3万年前の遺跡で、大量のナウマンゾウ、ヤベオオソノジカなどの大型の哺乳動物化石とともに石器や骨器が出土することで有名である。一般的な住居地（集落）の要素がみられないことから、狩猟解体場遺跡（キル・ブッチャリング・サイト）と考えられている。

仲町遺跡は、後期旧石器時代の全期間、さらに縄文時代以降へとつながる野尻湖遺跡群のなかでの中核的な遺跡である。

これに対して、上ノ原遺跡、貫ノ木遺跡、東裏遺跡、日向林B遺跡、照月台遺跡などの主要な後期旧石器時代の遺跡は、ほとんどが丘陵地に分布し、約3万年前のナイフ形石器文化のはじめごろの段階以降に遺跡が形成されたものである。

第2は、信濃町域では、旧石器時代から引き続いて縄文時代前期までは、遺跡の分布が多くみられるが、縄文前期後半の諸穢式期より後、中期になると遺跡数は急激

に減少する。この傾向は、弥生時代、古墳時代、奈良時代とつづく。

第3は、ふたたび信濃町域に遺跡が増えるのは、平安時代以降である。現在、信濃町の集落のある場所の多くは、平安時代の遺跡と重なっている場所があり、平安時代以降、町内の各地に集落が形成されてきたことが推察される。

以上のような遺跡分布の特徴がみられるが、近隣の市町村と比較すると、旧石器時代の遺跡が多いこと、縄文時代中期以降の遺跡が少ないと、そして遺跡数とその密度は近隣地区にくらべてかなり高いことが特筆される。

最初に記した信濃町の交通路の要所としての特徴は、平安時代以降、顕著になったものと思われる。延喜式に記録されている東山道の支路は、信濃町をとおり、沼迎駅（ぬへのうまや）は、仲町遺跡が有力と考えている。町内の主要部（野尻新町、柏原、古間、穗波の間）は、現在の国道18号線におおむね沿って江戸時代の北国街道が通じているが、東山道も北国街道に近い場所を通っていたと推定される。

信濃町北部の山桑地区には、町内としては数は多くないが、旧石器時代、縄文時代草創期以降の遺跡が分布する。瑞穂A遺跡は、1977年ごろ地主の丸山正行氏によって農耕中に大形の国府型ナイフ形石器が発見されて確認された遺跡である（中村、1988）。星光山荘B遺跡は、1995（平成7）年に上信越自動車道の調査で確認された縄文時代草創期の遺跡である。隆起線文土器が多数出土し、有茎尖頭器、槍先形尖頭器、石鏃、神子柴型局部磨製石斧などが伴い、ほかに縄文早期、前期前業、晚期および平安時代の遺物が出土している（土屋・中島編、2000）。

黒姫山麓で最初に考古学的調査がおこなわれたのは、1958年の仁之倉遺跡である（中村、1988）。前年の開墾により縄文土器などが大量に出土したことがきっかけで、縄文時代早期条痕文土器、前期諸穢式土器、中期堀ノ内I式土器、晚期佐野II式土器などがえられている。また、上山桑A遺跡に隣接する駒爪遺跡では、旧山桑分校校庭の造成時（1956～1958年頃？）に、縄文時代早期、

中期の遺物が出土したという。信濃町公民館野尻湖支館から野尻湖ナウマンゾウ博物館への移管遺物の中に「山桑古墳、野尻学校」と注記された特殊磨石2点があり、駒爪遺跡の出土品と思われる。

上山桑A遺跡の周辺では、上山桑B遺跡（縄文）、下山桑A、下山桑B、下山桑C、下山桑Dなどの遺跡が分布

しており、いずれも縄文時代に属するものであるが、詳細については未調査のため、不明である。星光山荘A遺跡は、1995年の発掘で、縄文時代早期の条痕文系土器、前期初頭の縄文土器、前期中葉の竹管文土器期の土器、石器などが出土している（土屋・中島編、2000）。

III 発掘地の状況と調査の概要

1 発掘地の状況

上山桑A遺跡は信濃町野尻地区の大字山桑に所在する。黒姫山の北東麓の斜面に位置し、この付近では県道杉の沢黒姫（停）線が標高740m前後のほぼ等高線沿いに走っている。道路沿いには山林の合間に畠地がつくられ、ペンションや別荘も建てられているが、それより奥は山林となっている。

信濃町のJR信越本線より西側の黒姫山麓では、発掘調査が少なく、1958（昭和33）年の仁之倉遺跡（開墾）、

1995（平成7）年の星光山荘A・B遺跡（高速道）で発掘がおこなわれただけで、考古学情報はあまり多くない。

上山桑A遺跡は、県道の両側に南北に380m、東西に160mの広がりが確認されている。おもに縄文時代と平安時代の遺跡である。

上山桑A遺跡のほぼ中央部にあたる県道の調査地域は、駒爪川をはさんで北地区と南地区に2分される。北

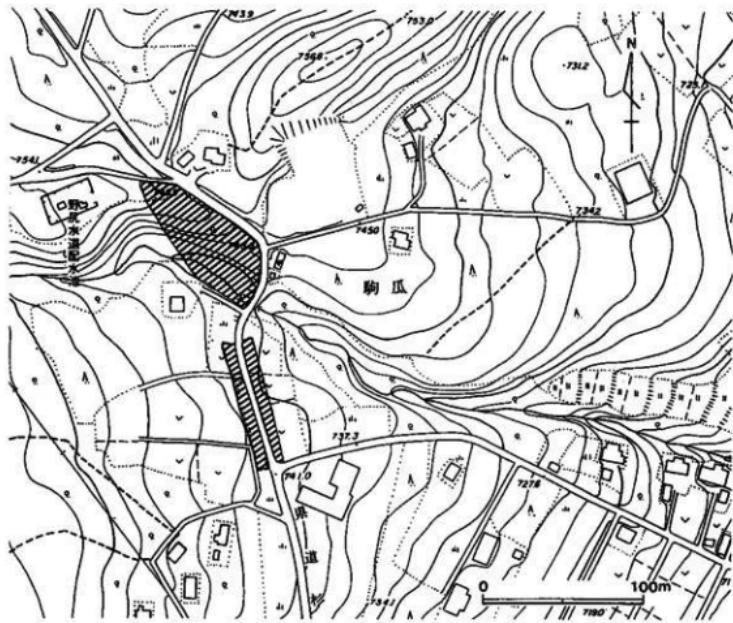


図2 上山桑A遺跡の調査位置

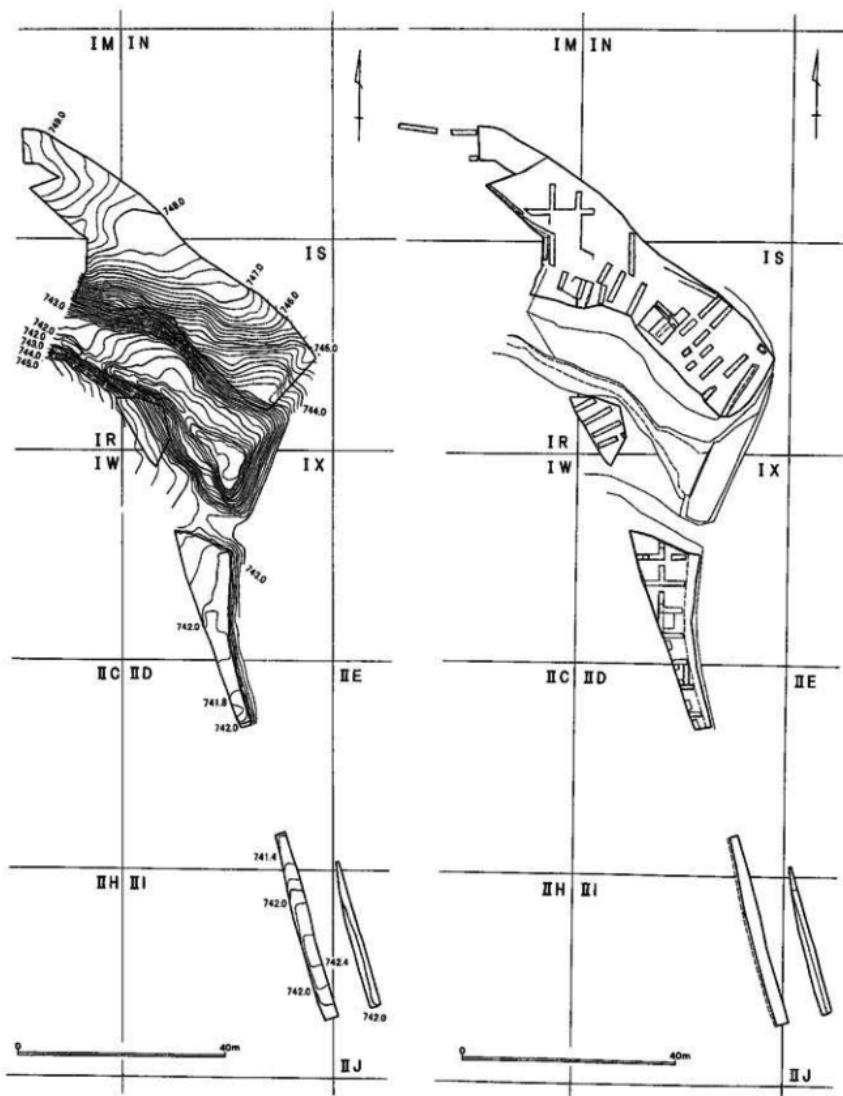
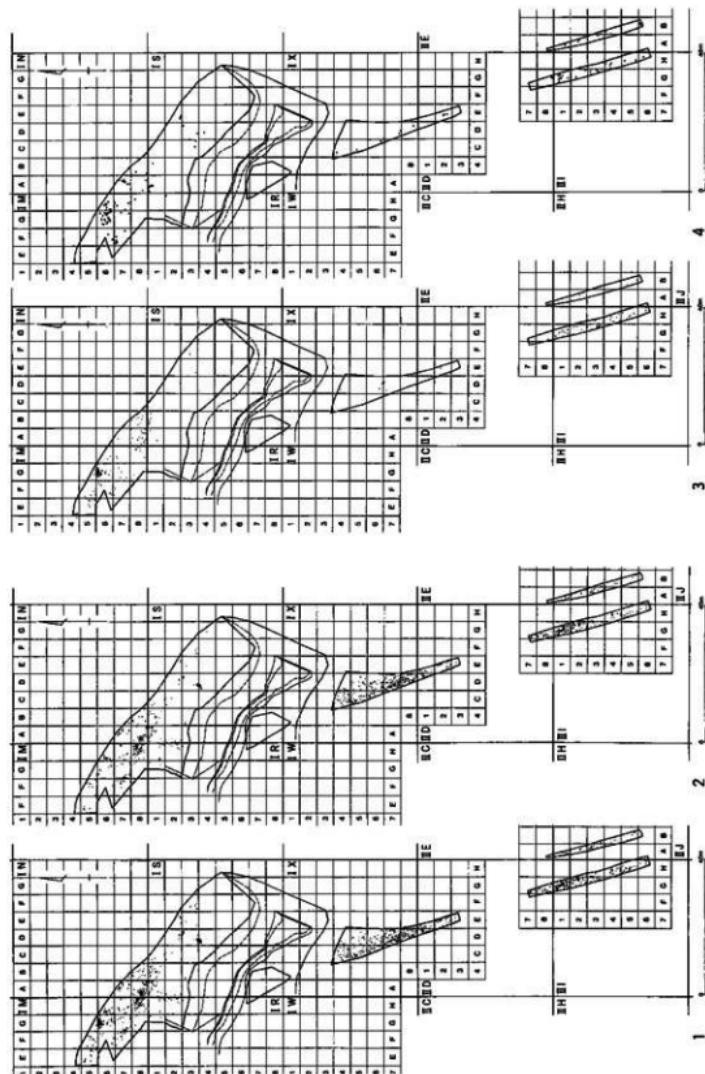


図3 上山桑A遺跡の地形

図4 上山桑A遺跡の調査区



1 全遺物 (縦をのぞく)、2 土器、3 石器、4 銅

図 5 上山桑 A 番地の出土遺物の分布

地区は、駒爪川の北側にそって分布する丘陵上の傾斜地にあたり、比較的に傾斜が強く、749mから743mへと標高差が大きい場所である。北地区は、川沿いの低位の面と一段高い面に分かれるが、遺物が出土したのは高い方の面である。新設の道路ルートが変更になったところ

で、全面的に発掘地となった。

一方、南地区はなだらかな緩斜面に位置し、道路は等高線に沿っているので発掘面は標高742m前後のほぼ平坦な地形である。

2 遺跡の地質層序

発掘地で標準的な層序が確認できるのは、南地区である。南2区では、下位より44cm+の黄褐色風化火山灰層(上部野尻ローム層)があり、約5cmの漸移層となっている暗褐色火山灰層(モヤ)をはさんで、約7cmの黒褐色火山灰層、約15cmの黒味の強い黒色火山灰層、約15cmの暗褐色粗粒火山灰、そして最上位には13cmの耕作土となっている表土があり、礫などを一切含まない安定した風成堆積物の層相を示している。南1地区もほぼ同様の層序である。

一方、北地区では、地表からかなり地下まで数cmから1m程度までの淘汰の悪い崖錐性の礫が多く含まれていることが特徴である。下位より、約5cm+の礫混じり暗灰褐色火山灰質シルト層、約5cmの漸移帶となっている

黒褐色火山灰土、25cmの礫混じり黑色火山灰土層、10cmの暗黒褐色火山灰層(キビダンゴ)、14cmの表土などが堆積している。黒色火山灰層は、下位に崖錐礫が多く、その上には黒味の強い黒色火山灰層となっている。「キビダンゴ」火山灰は、妙高山起源である。上半部には、崖錐性の礫が少なくなり、やや安定した立地環境になった時期もあると思われる。

このような層相からみて、南地区は後期更新世末から完新世にかけて比較的安定した環境にあったが、北地区はこの時期、時々、出水時には駒爪川に流れ込む山からの崖錐性の土砂をかぶるようなやや不安定な場所であったことがわかる。

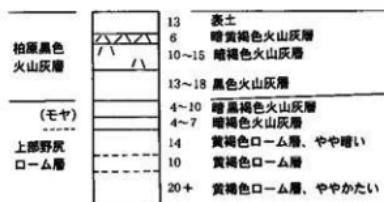
3 遺物の出土状況

北地区では、縄文時代の遺物は、高い方の緩斜面に多く分布していた。南地区は小さな道路を間にはさみ、南1区と南2区に分けられる。南1区は、畑地であったと

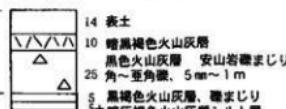
ころである。南2区は畠地の拡幅部で現道路の東西両側が発掘地となった。

縄文時代の遺物は、北、南1、南2の全域から出土し

南2区



北地区



単位: cm

図6 上山桑A遺跡の地層

表4 上山桑A遺跡の出土遺物点数

(単位:点)

	石器 (剥片・石核)	剥片・石核	磨石器	縄文土器	平安土器	銭貨	近現代 陶磁器	鉄製品	炭化物	礫	計
北地区	11	116	62	377	15				4	58	643
南1区	0	5	7	111	269	1	27	3		12	435
南2区	9	22	35	248	19				5	43	381
合計	20	143	104	736	303	1	27	3	9	113	1,459

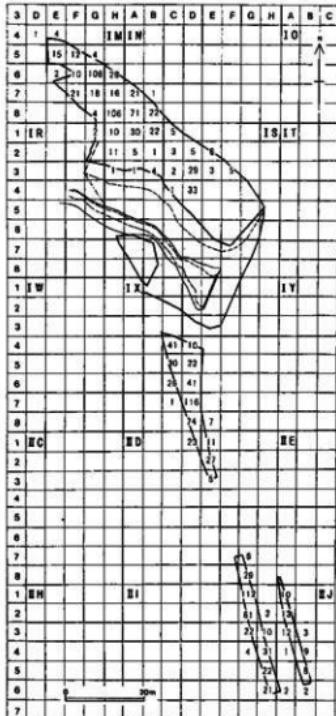


図7 上山桑A遺跡の出土遺物点数

た。北地区では、数cm~1mにもおよぶ大量の角砾~亜角砾が一面に分布しており、それらの間を埋めるように、早期沈線文系土器の後半期をのぞいて早~前期のはば全期間の遺物が出土している。これに対して、南1区は前期の諸磯式の土器がわずかにあるのみである。南2区は早期沈線文系土器の後半期のものが多く出土している。いずれの地区でも、遺構はなく、遺物は散布していた。

また、平安時代の遺物は、南1区と南2区に分布していた。

グリッドごとの出土点数を図7に示す。最も遺物数が多かったのは、北地区の中でも標高が高い北部で、IM区G6、H8グリッドで、ともに100点以上の出土品があった。南1区のIX区D7グリッド、南2区のII区G1グリッドも110点を越える遺物が出土した。

この発掘での出土遺物は、全部で1,459点あり、縄文土器736点、石器267点、平安時代の土器303点、大正12年の銭貨(半錢)1点、近現代陶磁器27点などがあり、このほかに取り上げた礫が113点あった。

IV 繩文土器

出土した縄文土器片の総数は、736点である。縄文時代早期の沈線文土器、条痕文土器、早期末～前期初頭の

土器、前期の諸磯式土器が出土した。

1 縄文時代早期、沈線文系土器

A 沈線文系土器1

1) 貝殻腹縁文が施された土器 [1-b]

1～15は、4単位のゆるやかな波状口縁で、キャリバー状に湾曲した口縁の土器である。口縁にそって2条の沈線がひかれ、その下に左に傾いた楕円形のモチーフの沈線で区画をおこない、その内部に貝殻腹縁文を沈線に平行に充填している。口縁上端には、貝殻腹縁文が斜めにつけられている。口縁にそった沈線の頂部には、円形刺突文が加えられている。暗褐色で、器壁は約5mmと薄手で、裏面も丁寧に仕上げられている。胎土には砂粒があまり多くなく、繊維はごく少量含まれている。

2) 沈線文で鍵の手状のモチーフをえがく土器 [2-a]

16、17は、キャリバー状に湾曲した口縁の土器で、平らな口唇をもつ。やや太い沈線文で鍵の手状のモチーフをえがき、その内部に幅1～2mmの細い沈線を斜位に充填している。暗褐色で、器壁は約7mmで、胎土には砂粒が少なく、繊維を含む。

B 沈線文系土器2

1) 肥厚した口縁に短沈線で矢羽根状の文様を施した沈線文系土器 [2-d]

18は、肥厚した口縁部に短沈線で矢羽根状の文様をつけ、その下に棒状工具で刺突をおこなう土器である。暗褐色で、砂粒の混入は少なく、繊維を含む。器壁は約6.5mmで、口縁の肥厚部は10mmである。

C 沈線文系土器3

1) 櫛齒状工具による条線がひかれ、刺突が施された沈線文系土器 [3-a]

19～24は、櫛齒状工具による条線（浅い平行沈線）で縦位に区画し、横位、斜位に条線をひき、空白部に櫛齒

状工具で刺突を充填している土器である。明褐色で、器壁は約6mmと薄手である。胎土には砂粒があまり多くなく、繊維を含んでいる。

25～28は、櫛齒状工具により縦位、斜位に条線をひき、その空白部に先の割れた半截竹管による刺突を充填している土器である。口縁には刺突列が施されている。暗褐色で、器壁は7～8mmであり、繊維を含む。

29は、縦位、横位、斜位に条線が引かれた土器である。褐色で、器壁は7.5mmで、繊維をやや多く含む。刺突はみられない。

2) 櫛齒状工具による条線がひかれ、口縁に棒状工具による刺突がおこなわれる土器 [3-b]

30～32は、口縁にそって櫛齒状工具による条線がひかれ、上端には刺突列がつけられた土器である。30・31は暗褐色で、器壁は7.5mmで、繊維を含む。32は縦区画の後、横位に荒い条線をひいており、褐色で器壁は10mmとやや部厚く、繊維を含む。

3) 横位の条線の下、文様帯下部に棒状工具で刺突列をつけるもの [3-b]

33～38は、荒い条線の下に刺突列をつけ、その下は無文の土器である。褐色で、器壁は6～7mmとやや薄手で、繊維を含む。

(注) [] 内には、Ⅶ章で区分した信濃町沈線文系土器の分類群を示す。

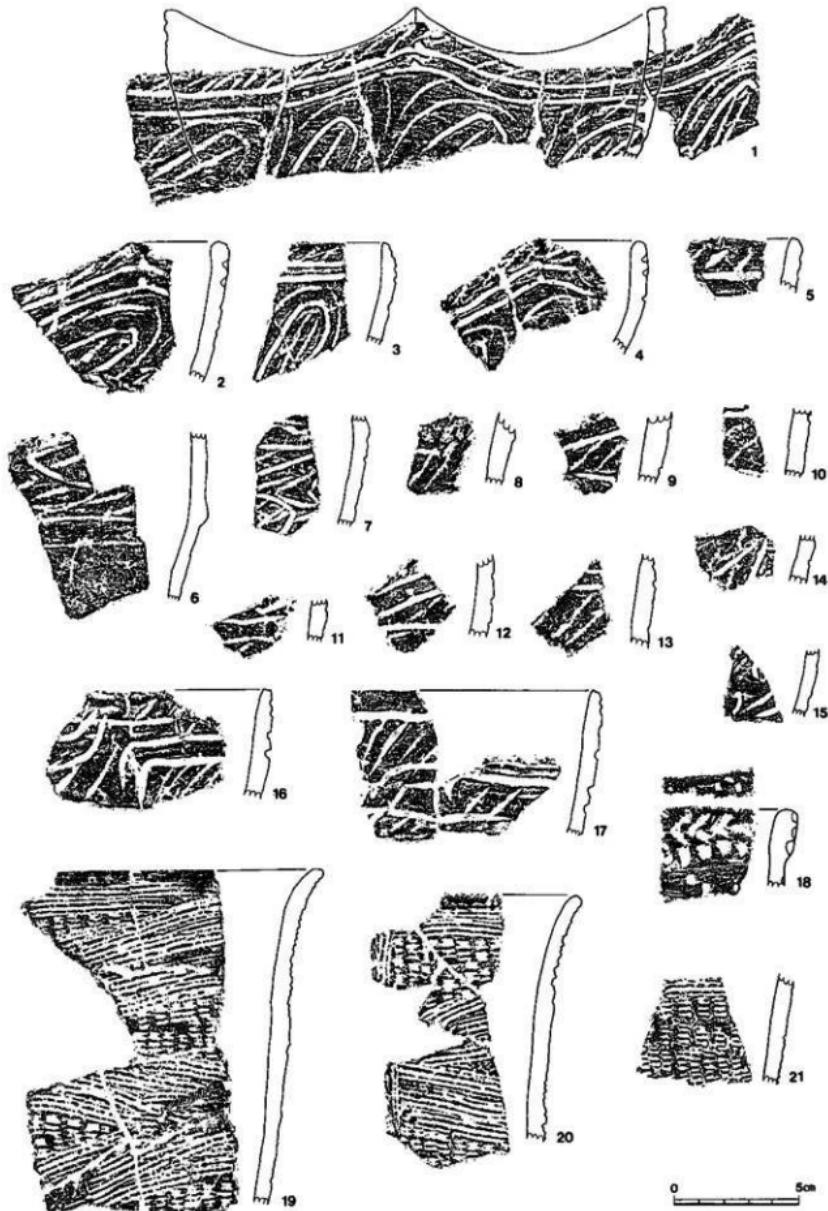


図8 上山桑A遺跡出土の縄文土器 1 早期沈線文系土器 1 (1-17)、2 (18)、3 (19-21)

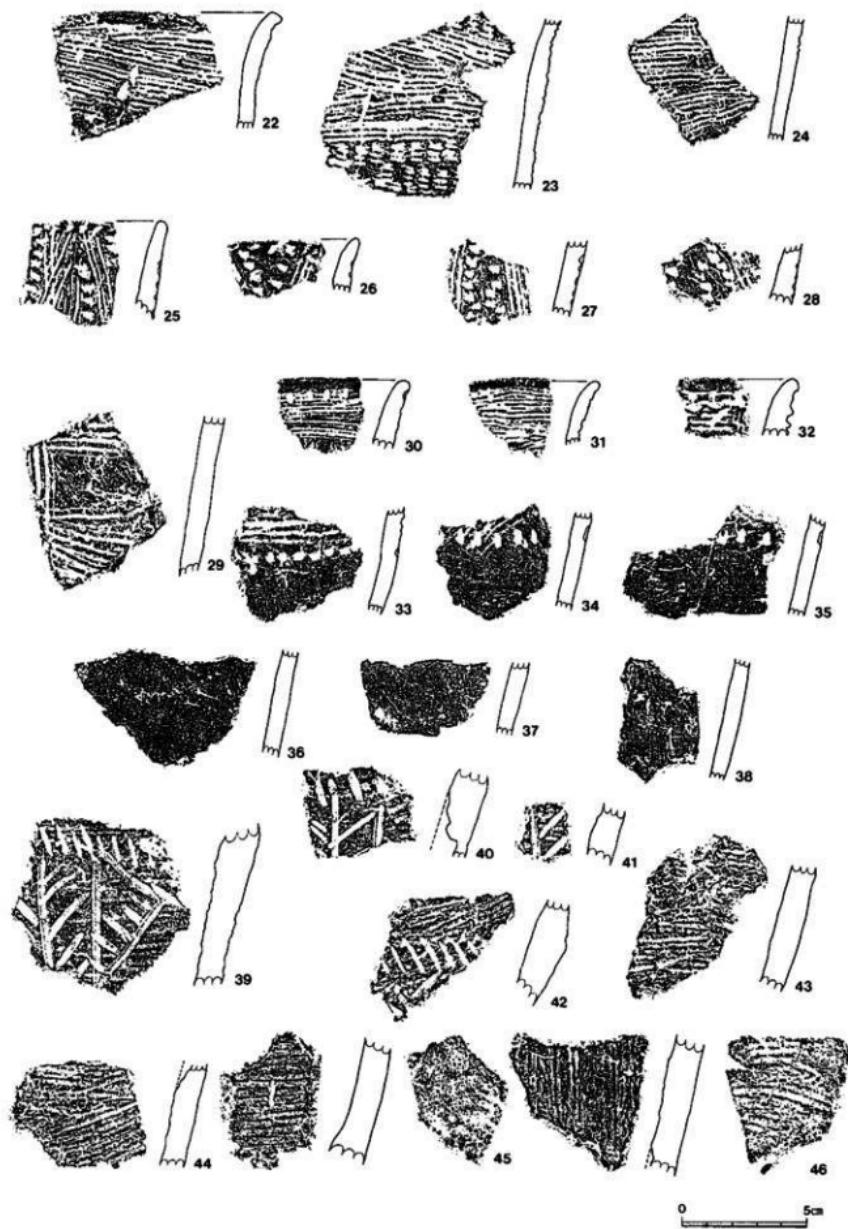


図9 上山桑A遺跡出土の縄文土器2 早期沈線文系土器3 (22-38)、条痕文系土器 (39-46)

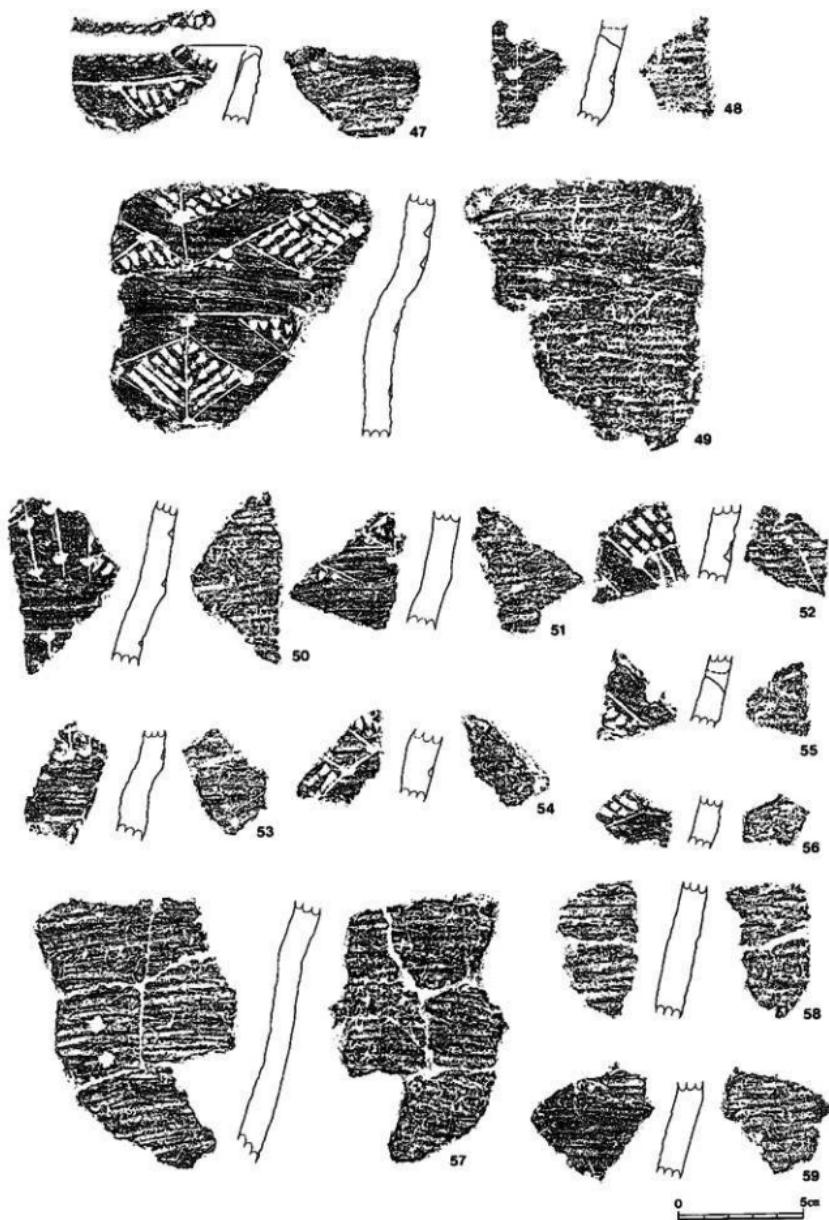


図10 上山桑A遺跡出土の縄文土器3 早期条痕文系土器 (47-59)

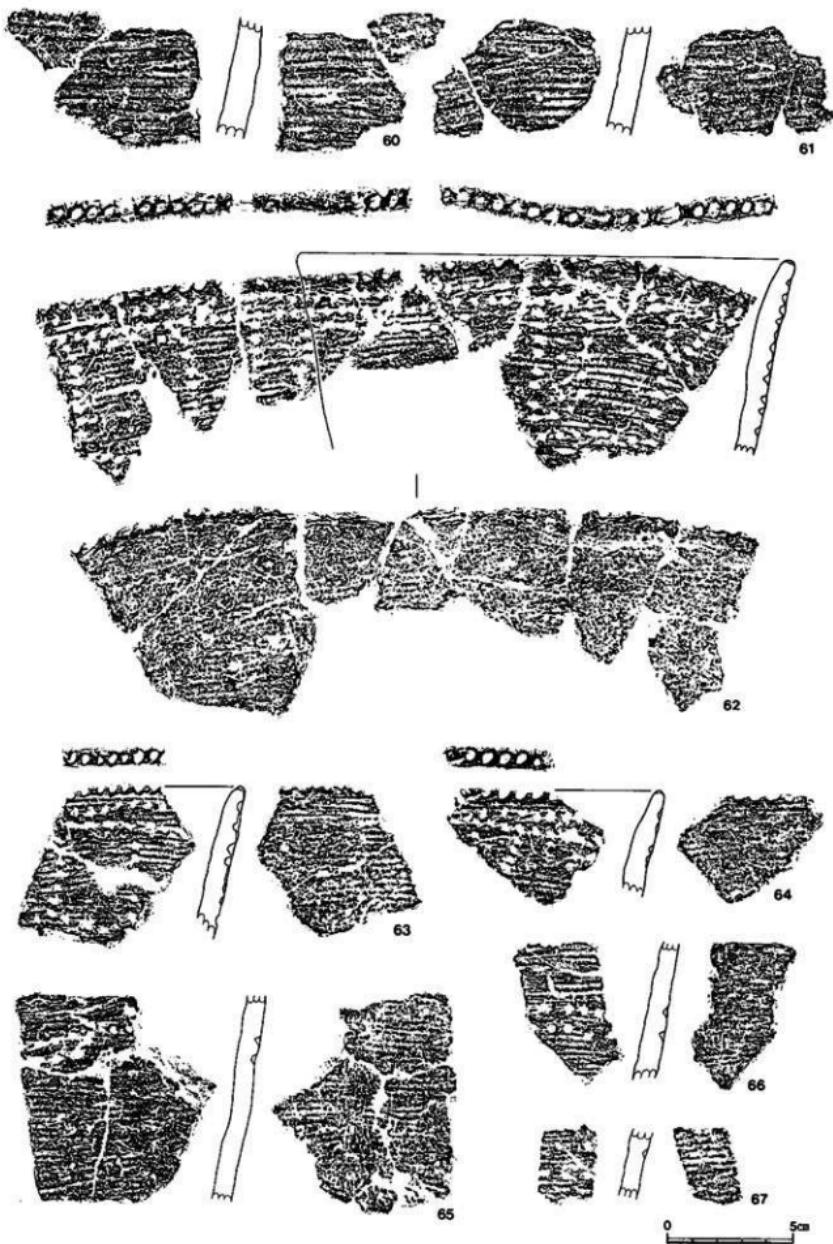


図11 上山桑A遺跡出土の縄文土器4 早期条旗文系土器 (60-67)

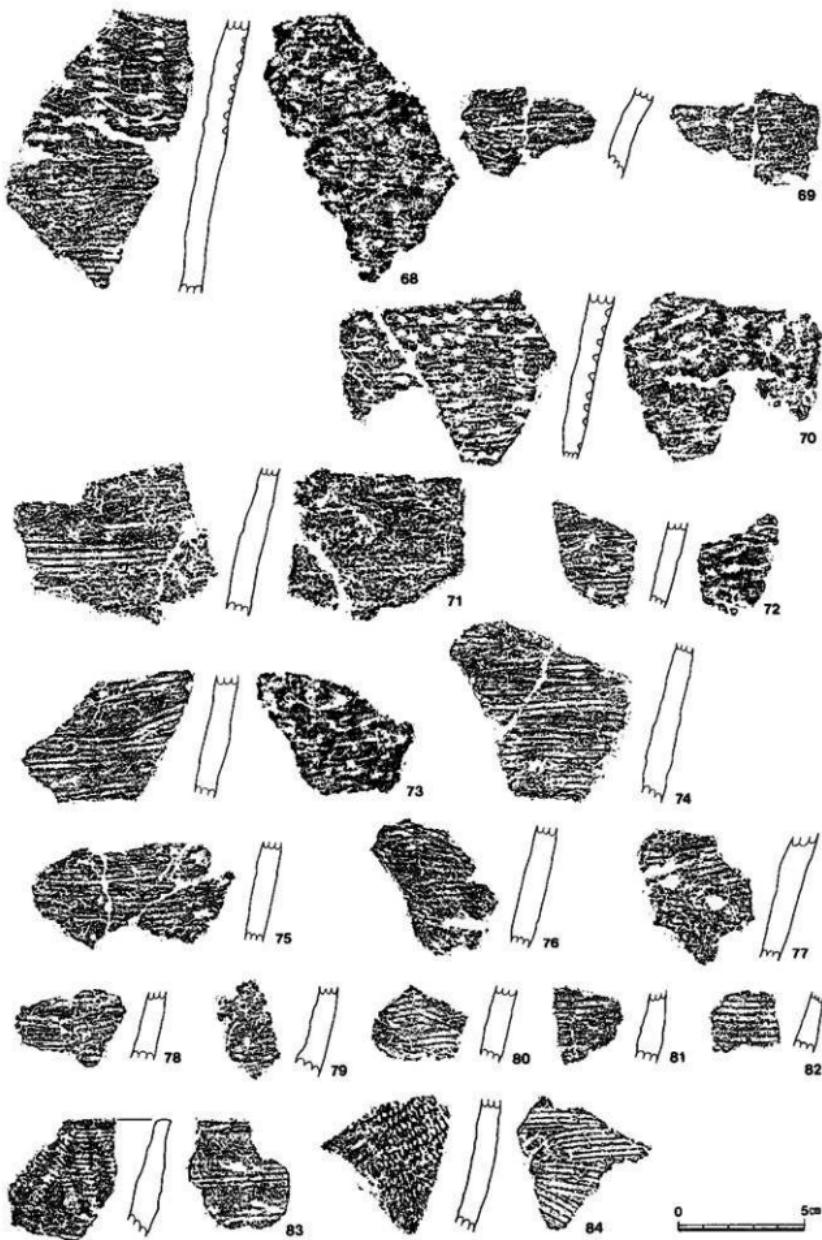


図12 上山桑A遺跡出土の縄文土器5 早期条痕文系土器 (68-84)

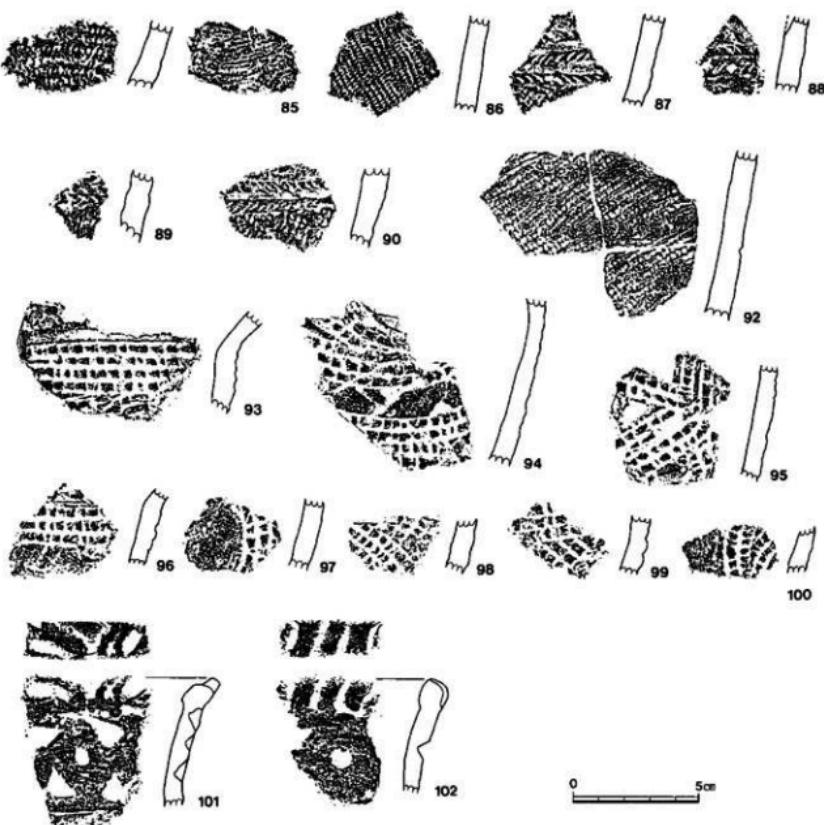


図13 上山桑A遺跡出土の縄文土器 6 早期条痕文系土器 (85-86)、前期土器 (87-90, 92-102)

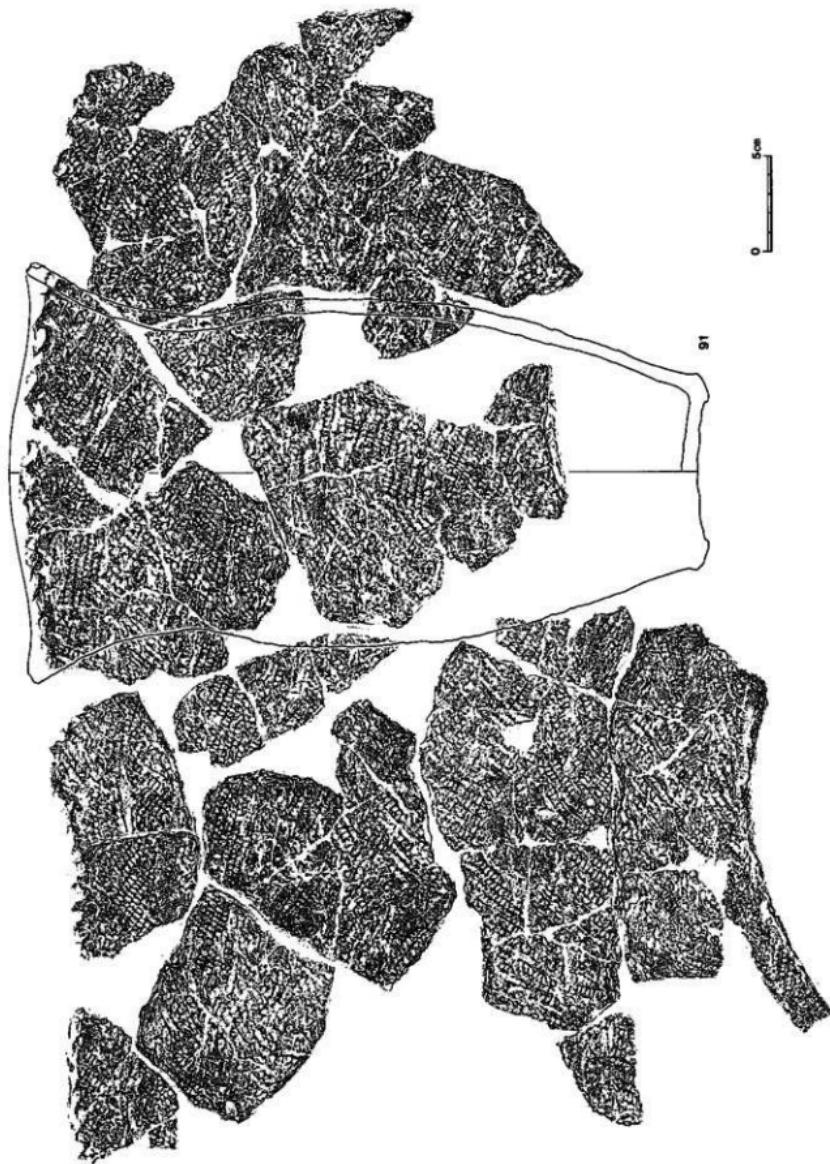


図14 上山桑A遺跡出土の縄文土器 7 前期土器 (91)

表5 上山桑A遺跡出土の縄文土器一覧(1)

No	時期	文様・文様要否	胎 土		織維混入量	遺物番号	備 考	
			量	砂粒の種類				
1	早期後葉	沈線文 I 1-b	沈線文、貝殻腹 線文、刺突文	少	白、qt、灰	砂	ごく微量 98KYA・I MH6-2, 3, 17, 18, 20 98KYA・I NH6-16	口縁部 1~154は同一個体
2	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I NA7-8, 9	*
3	*	*	*	*	-	*	98KYA・I MH6-1, H6-12	*
4	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MG6-9, 12	*
5	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MH8-2	*
6	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MH6-6, 15	*
7	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MH6-14	*
8	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MF7-8	*
9	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MF7-12	*
10	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MG7-2	*
11	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MF7-15	*
12	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MG7-1	*
13	夕	*	*	*	-	*	98KYA・I MF7-19	*
14	*	*	*	*	-	*	98KYA・I MF7-10	*
15	*	*	*	*	-	*	98KYA・I MH6-13	*
16	*	* - 2-a	沈線文	*	白、ch	砂	ごく微量 98KYA・I MH8-47, 48	口縁部
17	夕	*	*	*	白	砂	少 98KYA・I MH8-45, 98KYA・I NB8-18, 21	
18	*	その他 2-d	強帶、矢羽根状 刺突文	*	ho、qt、白>hy	有	98KYA・II IH6-16	口縁部
19	*	沈線文 II 3-a	条線、刺突文	有	白、赤、fl、ho	有~やや多 36, 38, 39	98KYA・II IG2-28, 30, 34, 35, 36, 38, 39	口縁部、19~24は 同一個体
20	夕	*	*	*	*	*	98KYA・II IG1-3, 9, 98KYA・II IG2-22, 51	*
21	夕	*	*	*	*	有	98KYA・II JA3-3	*
22	*	*	*	*	赤、白、ho	やや多	98KYA・II JA3-8	口縁部 *
23	*	*	*	少	fl、白、qt、赤	有	98KYA・II JA34-5, 6, 9	*
24	夕	*	条線	有	白、赤、qt、fl、ho	砂	やや多~有 98KYA・II IG1-7	*
25	*	*	条線、刺突文	*	ch、qt、白	砂	有 98KYA・II IG2-55	口縁部
26	夕	*	*	*	*	砂	98KYA・II IG2-17	*
27	*	*	*	少	*	少	98KYA・II IG2-8	
28	*	*	*	*	*	砂	98KYA・II IG2-9	
29	*	*	*	少~有	qt、ho、白、赤	砂	やや多 98KYA・II IG1-53	
30	夕	3-b	*	少	白、ch、qt	砂	有 98KYA・II IH4-15	口縁部 30, 31は同一個体
31	*	*	*	灰、赤	砂	やや多 98KYA・II IH4-4	*	*
32	*	*	*	*	qt、白、赤(砂)	有	98KYA・II IG1-92	口縁部
33	*	*	条線、刺突文	少~有	白、赤、ho、qt	少	98KYA・II IG2-29	
34	*	*	*	有	ho、qt、赤	有	98KYA・II IH6-19	高溫型石英
35	*	*	*	少	白、赤、ho	やや多~有 98KYA・II IG1-5, 6		
36	*	*	(無文)	*	*	*	98KYA・II IG2-23	
37	*	*	*	*	*	*	98KYA・II IG2-21	
38	*	*	*	*	*	少	98KYA・II IG2-53	
39	早期後葉	条痕文 I	沈線文、条痕文	やや多~多	qt>白、赤、bt	高	有 98KYA・I RH1-8	39~44は同一個体
40	*	*	*	*	*	高	有~やや多 98KYA・I RH2-1	*
41	*	*	*	*	*	高	有 98KYA・I RH1-6	*
42	*	*	*	やや多	*	高	やや多 98KYA・I RH2-3	*
43	*	*	条痕文	*	*	高	有~やや多 98KYA・I RH1-10	*
44	*	*	*	*	qt>白、赤、bt	高	有~やや多 98KYA・I RH1-7	*
45	*	*	*	多	qt>ho、mg、bt	高	有 98KYA・I SB1-15	
46	*	*	*	やや多	*	高	*	98KYA・I SB1-21
47	*	条痕文 2	条痕文、沈線文、 押引文、刺突文	有~ やや多	白、灰、赤、qt	やや多	98KYA・I SD4-27	口縁部 47~61は同一個体

表6 上山桑A遺跡出土の縄文土器一覧(2)

No	時期	文様・文様要素	胎 土		繊維混入量	遺 物 書 号	備 考	
			量	砂粒の種類				
48	早期後葉	条痕文2 条痕文、沈線文、刺突文	有	白、灰、赤、qt	少	98KYA・I SD4-7	*	
49	*	*	*	やや多	白、qt、赤	高・珍 多	98KYA・I SD3-2, 3	*
50	*	*	*	有～ やや多	白、赤、qt	*	98KYA・I SD4-32	*
51	*	*	*	有	白、qt、赤、mg	*	98KYA・I SD3-12	*
52	*	*	*	*	白、赤、qt	やや多	98KYA・I SD4-19	*
53	*	*	*	*	*	*	98KYA・I SD4-33	*
54	*	*	*	*	*	*	98KYA・I SD4-24	*
55	*	*	*	*	白、灰、qt	珍 有	98KYA・I SD3-10	*
56	*	*	*	有～ やや多	*	珍	98KYA・I SD4-25	*
57	*	*	*	*	白、qt、灰、赤	*	98KYA・I SD3-11, 98KYA I SD4- 2, 14, 15, 16	*
58	*	*	*	有	*	*	98KYA・I SD4-26, 31	*
59	*	*	*	*	灰、qt、赤、白	珍	98KYA・I SD4-20	*
60	*	*	*	有～ やや多	白、qt、輕石	*	98KYA・I SD3-5, 6	*
61	*	*	*	*	白、qt、赤、灰	*	98KYA・I SD3-8, 16	*
62	*	条痕文・ その他	条痕文、刺突文	*	qt, bt, ho	多	98KYA・I MH8-21, 23, 86, 87, 88, 89, 90 98KYA・I MH8-101, 104 (2)	62～82 口縁部
63	*	*	*	*	*	たいへん多	98KYA・I MH8-15, 90	*
64	*	*	*	*	*	多	98KYA・I MH8-10	*
65	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-90 (2), 91	
66	*	*	*	*	*	*	98KYA・I RG1-2	
67	*	*	*	*	*	*	98KYA・I SAI-2	
68	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-103, 106	
69	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-95, 98KYA・I SAI-16	
70	*	*	*	やや多	*	たいへん多	98KYA・I MH8-105, 106	
71	*	*	条痕文	*	*	多	98KYA・I MH8-19, 92	
72	*	*	*	有～ やや多	*	*	98KYA・I MH8-96	
73	*	*	*	*	*	たいへん多	98KYA・I MH8-93	
74	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-16, 18	
75	*	*	*	*	*	多	98KYA・I MH8-9, 22, 90	
76	*	*	*	*	*	たいへん多	98KYA・I NA7-10	
77	*	*	*	有	*	*	98KYA・I NA8-26	
78	*	*	*	有～ やや多	*	多	98KYA・I MH8-12	
79	*	*	*	*	*	*	98KYA・I SB3-2	
80	*	*	*	*	*	*	98KYA・I NA7-6	
81	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-20	
82	*	*	*	*	*	*	98KYA・I MH8-102	
83	*	条痕文、 格査体压痕文	少～有	白、灰、qt	やや多～多		98KYA・I MG7-13	口縁部
84	*	査文、条痕文	有～ やや多	白、qt、赤	有		98KYA・I IG1-107	
85	*	*	*	やや多	白、qt、ho、赤	有	98KYA・I IG1-113	
86	*	査文	有～ やや多	ho, mg, 白, qt	少		98KYA・I JA2-12	
87	前期 (説明 b)	浮雕文	矢羽根状刺み列	有	白、灰、茶、ho	珍	98KYA・I XD4-8	
88	*	*	*	少～有	*	珍	98KYA・I XC4-41	
89	*	*	*	有	*	珍	98KYA・I XD5-1	
90	*	*	*	*	*	珍	98KYA・I XC4-40	

表7 上山桑A遺跡出土の縄文土器一覧（3）

No.	時期	文様・文様要素	胎 土		織様混入量	遺 物 書 号	備 考
			量	砂粒の種類			
91	前期・後半 (踏破)	羽状織文	少～有	白、赤、au		98KYA・IMH8-5, 6, 7, 8, 25, 26, 27, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 67, 77, 79, 80, 81, 97, 98 98KYA・INA8-3, 4, 5, 6, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 19, 20, 21, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 50, 52, 53, 59, 60, 69	
92	*	縦文	少	白、qt、ho		98KYA・ISB3-1, 98KYA・ISC2-2	
93	前期末	縦節縦文	有～ やや多	白、灰、qt、赤、ho		98KYA・ISD2-22, 25	93～100は同一個体
94	*	*	*	*		98KYA・ISD2-3, 5, 98KYA・ISD3-27	*
95	*	*	*	*		98KYA・ISD3-24, 28	*
96	*	*	*	*		98KYA・ISD3-26	*
97	*	*	*	*		98KYA・ISE2-1	*
98	*	*	*	*		98KYA・ISD3-27	*
99	*	*	*	*		98KYA・ISD3-23	*
100	*	*	*	*		98KYA・ISD3-19	*
101	*	三角印刷文	有	白、赤、qt、fl、ho		98KYA・ISD3-18	口縁部 101, 102 は同一個体
102	*	*	*	*		98KYA・ISD3-20	*

(注) 砂粒の記号

qt 石英、ho 角閃石、au 鋼石類、hy シソ輝石、bt 黒碧母、mg 磁鐵鉱、fl 長石類、白 白色岩片、赤 赤色岩片、灰 灰色岩片、茶 茶色岩片、
黒 黑色岩片、ch チャート、高 高温型石英を含む、渺 水磨された渺の粒子を含む、ガ 沙 疊鑿性の沙を含む

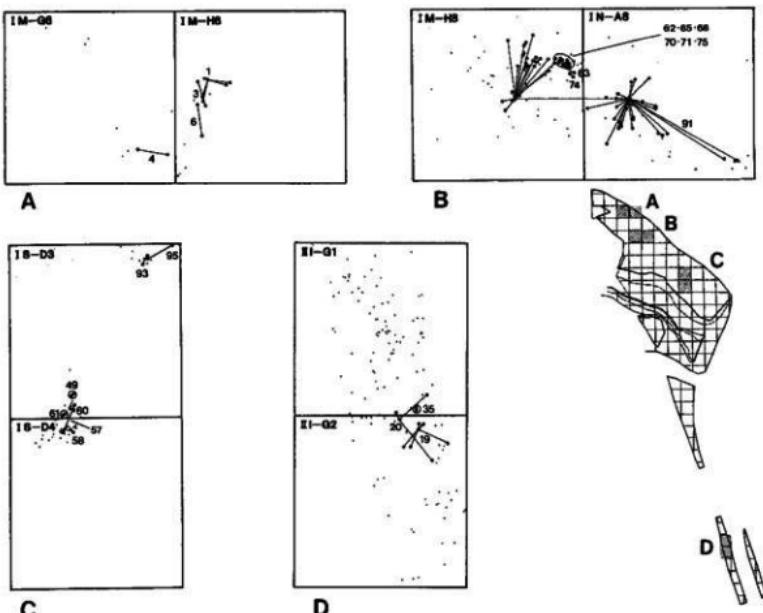
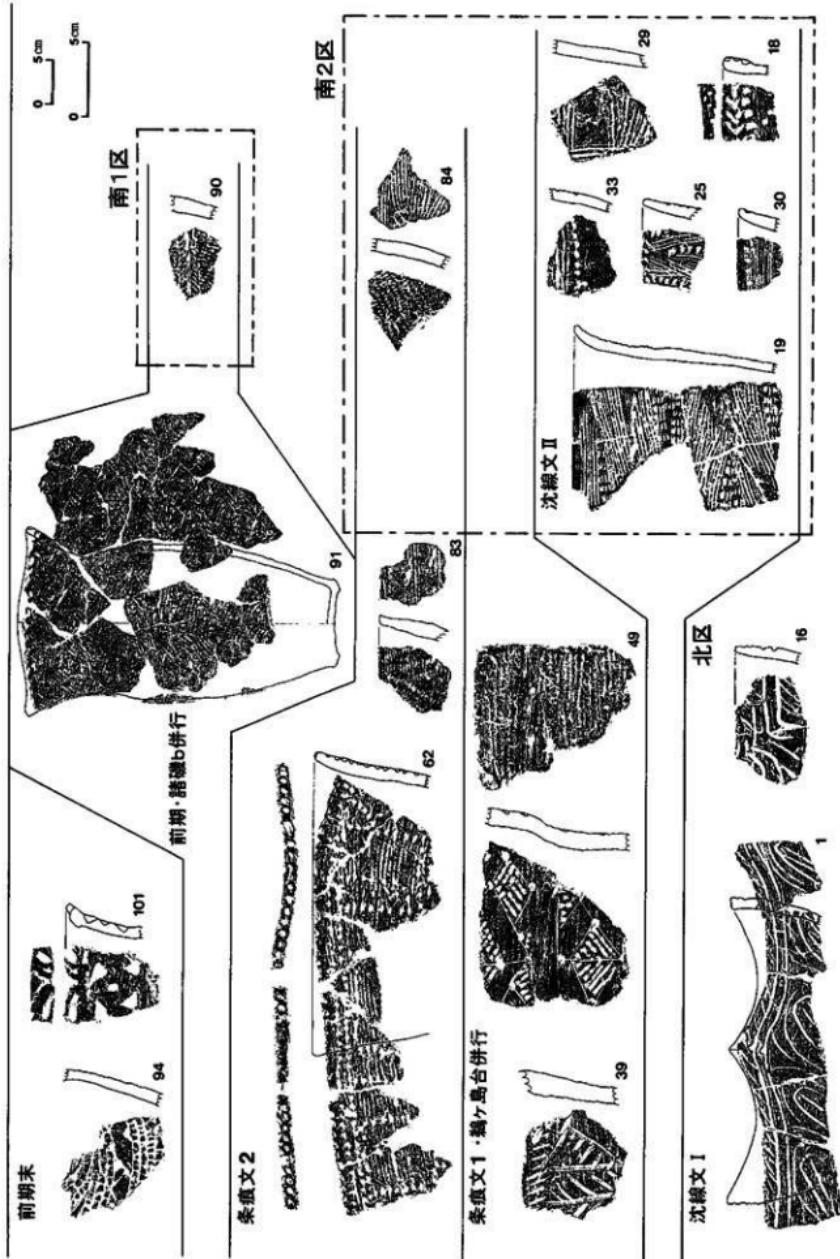


図15 上山桑A遺跡の縄文土器の接合関係



図16 上山桑A遺跡の縄文土器の分布

図17 上山桑A遺跡の繩文土器の変遷



2 繩文時代早期、条痕文系土器

A 萬ヶ島台式併行の土器1

39~46は、太目の沈線で縦位、斜位に区画をおこない、その中を沈線による斜線を充填している土器である。段の部分には、沈線による斜線が施されている。褐色で、表面には横位、斜位の条痕がみられるが、裏面にはみられないものがある。器壁は10~12mmと厚く、胎土には砂粒がやや多く、火山灰起源の高温型石英（水晶）を特徴的に多く含んでいて、繊維を含む。

B 萬ヶ島台式併行の土器2

47~61は、細い沈線で菱形のモチーフをえがき、その内部を押引文で充填しており、交点には竹管による刺突文が加えられている。表裏両面に横位の条痕がみられる。1段の段が認められる。暗褐色で、器壁は9~11mmと厚い。胎土には砂粒はあまり多くなく、繊維はやや多く含まれる。

C その他の条痕文系土器

62~82は、口唇に刻みがあり、口縁にそって横位に2列、その下には縦位に刺突列をつけた土器である。やや開き気味に、直に立ち上がる器形である。表裏両面に横位に条痕がつけられているが、裏面は顯著でない。器壁は7~9mmで、胎土にはやや多く砂粒を含み、繊維は多いたいへん多く含む。

83は、口縁に縦方向斜位に太い格条体を押し付けた格条体压痕文土器である。暗赤褐色で、胎土には繊維をやや多く含む。器壁は7.5~10mmで、よわい段が認められる。表裏に横位の条痕がついている。

84、85は、単節R Lの原体を用いた斜縄文の土器である。裏面には横位、斜位に条痕がついている。褐色で、器壁は8mmで、胎土には砂粒をやや多く含み、繊維を含んでいる。

86は、単節R Lの原体を用いた斜縄文の土器である。褐色で、器壁は8mmで、繊維を少し含む。

3 繩文時代前期、諸磯b式併行土器

87~90は、浮線文を平行に貼り付け、浮線上に矢羽根状の刻み列を施す土器である。その下には、単節R Lの原体の縄文を地文としている。褐色で、器壁は8~9mmである。

91は、底部から開き気味に立ち、胴部で若干すぼまつた後、外反するゆるい波状口縁の深鉢である。単節R L

- R Lの原体を交互に回転した羽状縄文である。口唇には、刺突が施されている。暗褐色で、器壁は8mmで、胎土には砂粒が少なく、繊維も含んでいない。

92は、単節R Lの原体を用いた斜縄文の土器である。赤褐色で、器壁は8.5~10mmである。

4 繩文時代前期末の土器

93~100は、結節浮線文を3~4本平行につけて、連続爪形文がつけられた土器である。暗褐色で、器壁は7~8mmである。

101・102は、口縁に三角印刻文を施す土器である。そ

の間には円形の刺突文が加えられている。口唇にはヒモ状の粘土を貼り付けて装飾している。暗褐色で、器壁は7~8mmである。

5 上山桑A遺跡における縄文土器の分布と変遷

発掘地における土器の分布状況を図15、図16に示す。北地区には、沈線文系土器Ⅰ、条痕文系土器Ⅰ、条痕文系土器Ⅱ、前期諸磧b式並行、前期末の各時期の土器が出土している。このことから、巨礫がごろごろとあるにもかかわらず、川沿いの高台にある北地区が、縄文時代にはこの遺跡の中心であったことがわかる。図15の土器の接合関係を見ると、それぞれの土器片はそれほど散らばらず、数mの範囲内にあることがわかる。1個体に復元される土器は少ないが、この周辺地区も発掘調査しているので、これらの土器が遠方から流され移動してき

たものでなく、この地点で使用・破棄されたものであると思われる分布状況である。このことは、土器片の磨滅が少ないとからも支持される。

南1区では、縄文土器の出土はあまり多くなく、前期諸磧b式期の土器がわずかにみられるだけである。

南2区では、沈線文系土器Ⅱ群、条痕文系土器Ⅱ群の土器が認められる。とりわけ、沈線文系土器Ⅱ群の時期には、ここが生活の場であったと思われる。南2区でも、土器は2mほどの範囲での接合関係であり、遺物はあまり移動をこうむっていないことが考えられる。

V 石 器

主要な石器としては、石鎌8点、石鎌未製品3点、スクレイパー2点、クサビ形石器4点、石斧2点、石斧未製品1点、特殊磨石10点、磨石48点、凹石1点、敲石10点、石皿14点、剥片78点、碎片53点、石核8点などがあり、合計267点の石器類が出土した。

石鎌

1～5は凹基無茎で、抉りの浅い石鎌である。黒曜石(1)、無斑晶質安山岩(2、5)、珪質凝灰岩(3)、チャート(4、5、7)などを素材としている。

1～3は、丁寧な押圧剥離が全面を覆っている。4の裏面には深い剥離が生じていて、結果としてやや湾曲した器形を呈している。5は、やや荒い加工である。

6、7は平基無茎の石鎌で、二等辺三角形を呈している。いずれもチャート製である。6は小形のものである。7は大ぶりのもので、周縁調整で仕上げられている。いずれも片側の脚部を欠損している。

8～10は、石鎌未製品である。無斑晶質安山岩(8)、珪質凝灰岩(9)、流紋岩(10)を素材としている。9、10は、2辺に押圧剥離で周縁調整し、元の剥片の尖った縁部である基部には調整がおこなわれていない。8は、基部に平坦な剥離が入れられ、側縁の一部にも調整が入るが、ほかは未加工である。

スクレイパー

11、12は、スクレイパーである。11は、厚い無斑晶質安山岩の剥片を素材とし、1辺に厚い刃部加工された片側加工のものである。12は、チャート製の刃部が若干内湾ぎみになった直線状の器形である。幅広の剥片の端部をおもに主剥離面側に刃部の加工が施された片側加工のものである。

クサビ形石器

13、14は、剥片を素材とし、上下両端に小剥離痕がみられるクサビ形石器である。13は碧玉(鉄石英)、14は珪質凝灰岩製である。ともに断面がレンズ形を呈する典型的な形態のものである。

15は、黒曜石製のクサビ形石器で、下端が尖った形で、上下両端に小剥離痕がみられる小形のものである。大きく破損しており、もとの形状は不明である。

16は、チャート製の小形のクサビ形石器である。上下両端にわずかに小剥離痕が認められる

剥片

17は、黒曜石製の縦長剥片である。両側縁の下部に小剥離痕がおもに背面側に連続して認められる。使用された剥片と思われる。

石斧

18、19は、蛇紋岩製の磨製石斧である。18は、ほぼ全

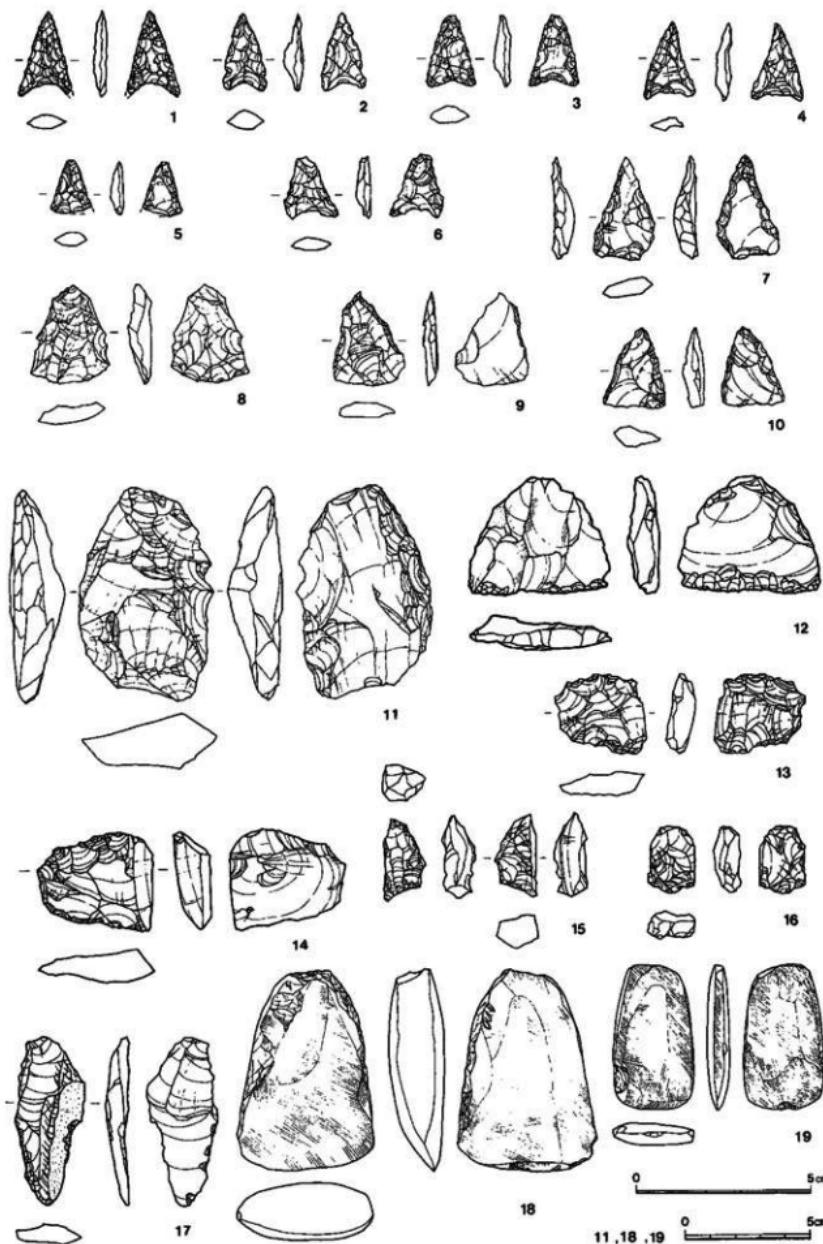


図18 上山桑A遺跡出土の縄文時代石器 1

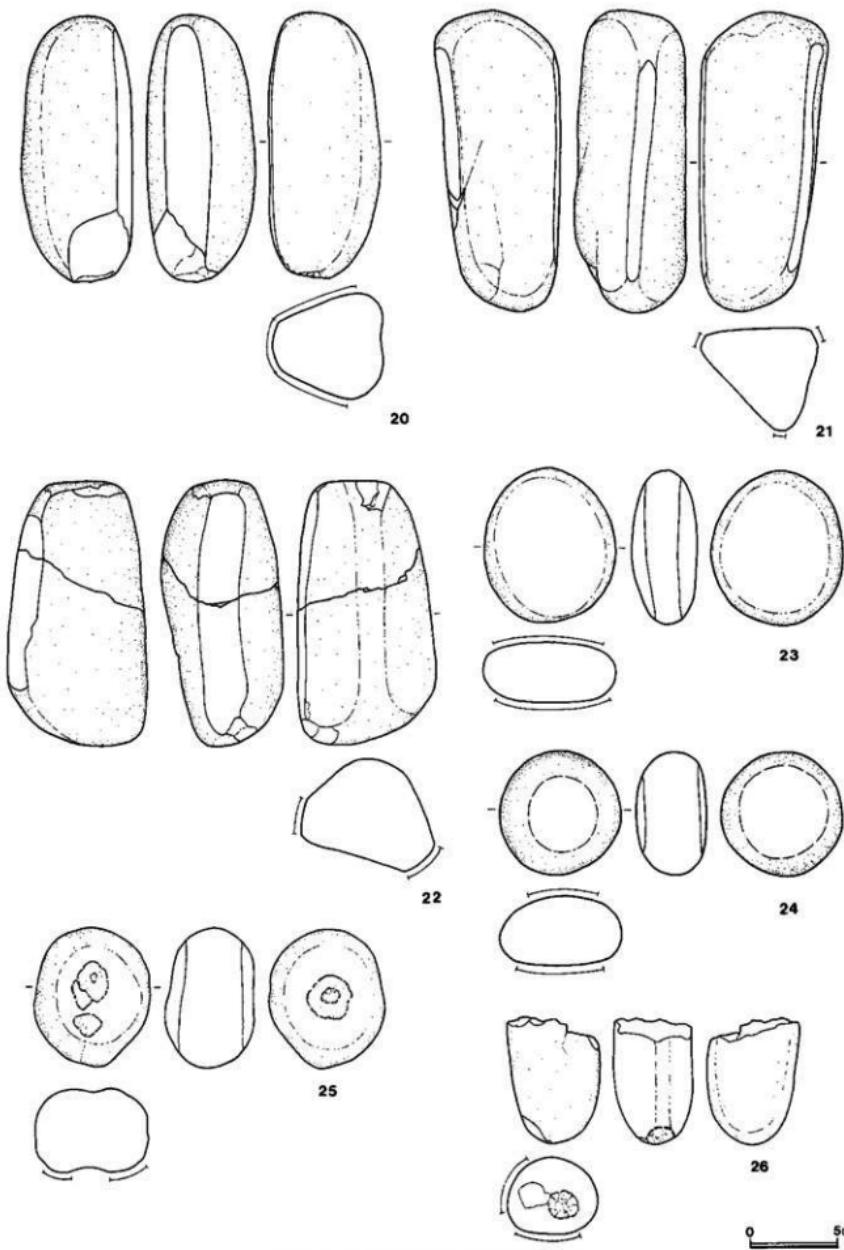


図19 上山桑A遺跡出土の縄文時代石器 2

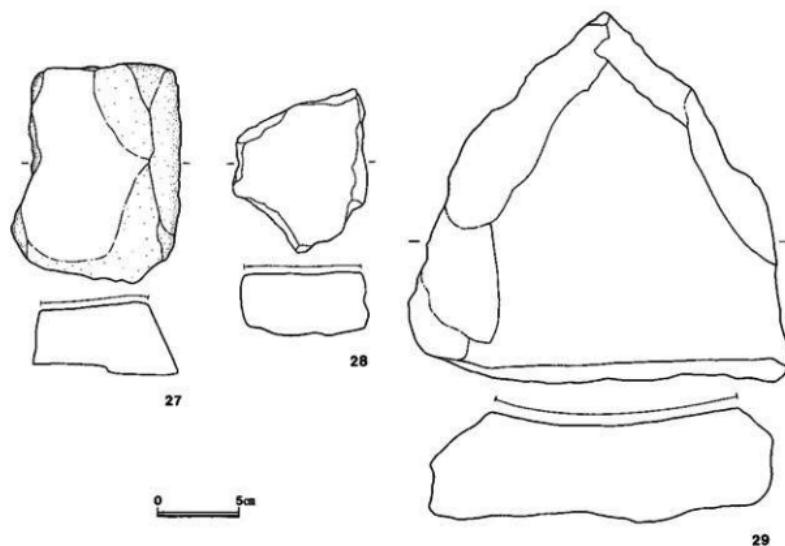


図20 上山桑A遺跡出土の縄文時代石器3

表8 上山桑A遺跡の出土石器の内訳

石器 (剥片石器)	石核	8	〔石材内訳〕
	石核未成品	3	黒曜石
	スクレイバー	2	無斑晶質安山岩
	クサビ形石器	4	チャート
	石斧	2	珪質凝灰岩
	石斧未成品	1	玉ずい
			碧玉(鉄石英)
剥片・石核	石核(黒曜石)	8	蛇紋岩
	剥片・碎片(黒曜石)	104	〔石材内訳〕
	+ (無斑晶質安山岩)	15	黒曜石
	+ (その他)	16	無斑晶質安山岩
			砂岩
			チャート
			珪質凝灰岩
磨石器	特殊磨石	10	珪質頁岩
	磨石	48	玉ずい
	磨石	10	〔石材内訳〕
	凹石	1	砂岩
	石皿	14	花こう閃綠岩
	磨石?	8	安山岩
	石皿状塊	13	74
石器類合計		267点	

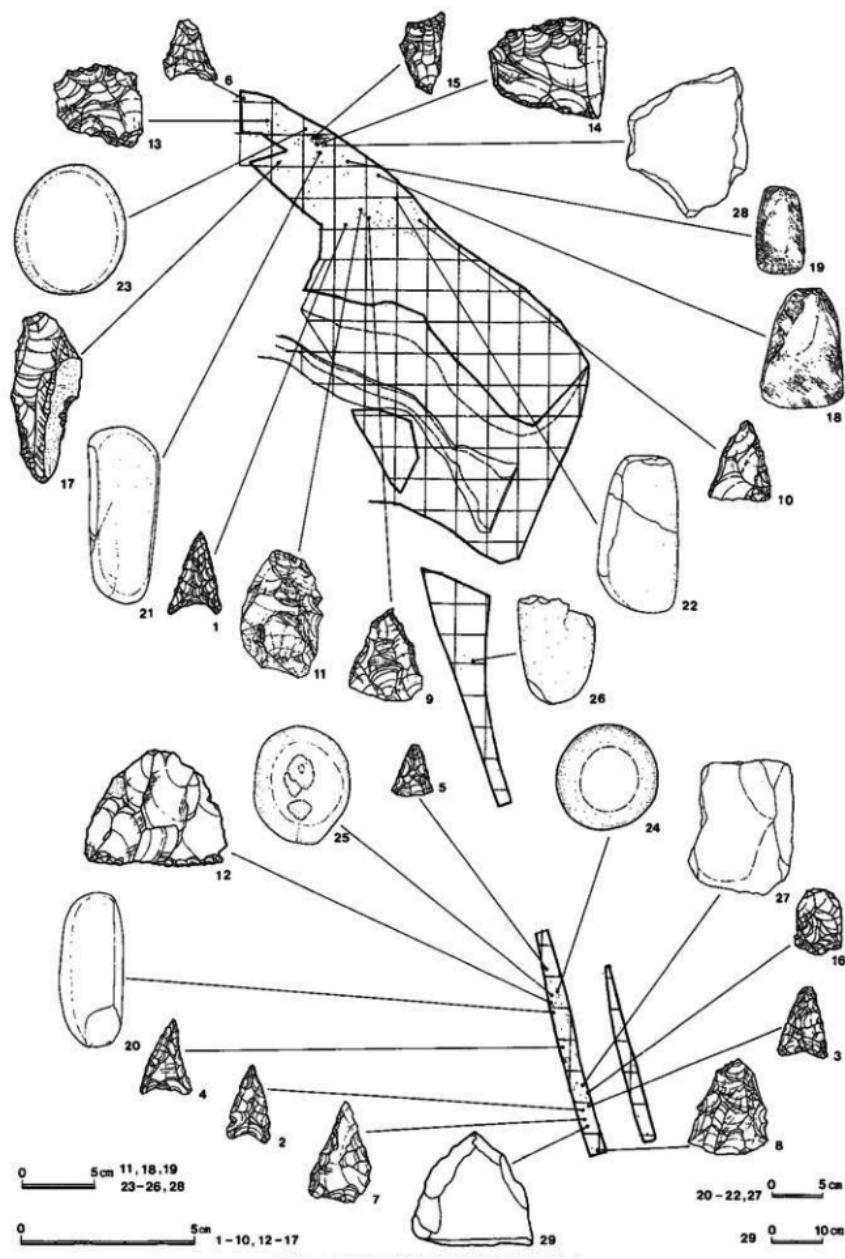


図21 上山桑A遺跡の縄文時代石器の分布

表9 上山桑A遺跡出土の縄文時代石器一覧

(単位: cm, g)

No	名称	石材	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石 鋸	黒曜石	98KYA I MH8-55	2.3	1.5	0.4	0.6	
2	〃	無理晶質安山岩	98KYA II IH5-11	2.1	1.2	0.5	0.7	
3	〃	珪質凝灰岩	98KYA II IH5-13	1.9	1.3	0.4	0.6	
4	〃	チャート	98KYA II IG3-14	2.1	1.4	0.4	0.8	
5	〃	〃	98KYA II DG8-12	1.4	1.1	0.4	0.4	
6	〃	無理晶質安山岩	98KYA I ME4-1	1.8	1.5	0.4	0.7	
7	〃	チャート	98KYA II IH5-5	2.8	1.8	0.5	2.0	
8	石 鋸 未 製品	無理晶質安山岩	98KYA II IH6-1	2.7	2.2	0.6	3.3	
9	〃	珪質凝灰岩	98KYA I NA8-17	2.6	2.0	0.4	1.5	
10	〃	玉 鶴	98KYA I NB8-11	2.1	1.7	0.5	1.3	
11	スクレイバー	無理晶質安山岩	98KYA I MH8-83	8.4	5.4	2.1	88.4	
12	〃	チャート	98KYA II IG1-89	3.3	4.1	0.8	10.6	
13	クサビ形石器	碧玉(鉄石英)	98KYA I ME5-3	2.1	2.5	0.8	4.3	
14	〃	珪質凝灰岩	98KYA I MG6-26	2.8	3.3	0.9	8.8	
15	〃	黒曜石	98KYA I MG6-105	2.3	1.1	0.9	2.0	
16	〃	チャート	98KYA II IH4-24	1.9	1.3	0.7	2.3	
17	剥 片	黒曜石	98KYA I MF6-3	4.6	2.0	0.5	3.8	微細剥離痕有
18	石 斧	蛇紋岩	98KYA I NA8-47	7.7	5.4	2.2	140.2	
19	〃	〃	98KYA I MH6-22	5.7	3.2	0.8	27.0	
20	特 殊 磨 石	砂 岩	98KYA II IG2-41	15.0	6.0	6.4	826.7	
21	〃	〃	98KYA I MG6-14	17.1	7.0	6.2	1071.3	
22	〃	安 山 岩	98KYA I NA8-66	15.1	6.3	7.9	1045.8	接合
23	磨 石	砂 岩	98KYA I MF5-9	8.7	7.4	3.7	311.7	
24	〃	〃	98KYA II IG1-17	7.2	6.9	3.9	248.4	
25	凹 石	安 山 岩	98KYA II IG1-20	8.1	6.5	5.2	317.6	磨石併用
26	磨 石	〃	98KYA I XD6-41	7.4	5.2	4.5	218.8	磨石併用
27	石 盔	〃	98KYA II IH4-14	13.5	10.3	4.5	877.2	
28	〃	〃	98KYA I MG6-46	9.1	8.4	3.6	422.1	
29	〃	〃	98KYA II IH5-3	21.5	22.8	6.7	382.0	

面を研磨した定角式磨製石斧である。刃部は特に念入りに研磨されており、「弱凸強凸片刃」の形態を呈している。側縁および頭部の研磨は弱く、荒い剥離面の大部分が残存している。

19は、全面を研磨した小形の定角式磨製石斧である。

特殊磨石

20~22は特殊磨石である。断面三角形の細長い円~亜円礫を選んでいる。

20は、長軸にそってとがった1縁部を磨り減らして、磨面をつくりだしている。この両側の2側面も、磨面として利用している。上下両端に敲打痕をもち、1端にはそこから剥離痕が生じている。

21は、長軸にそってとがった3縁部を磨り減らして、磨面をつくりだしている。20、21はともに砂岩製である。

22は、安山岩製で、長軸にそってとがった2縁部を磨り減らして、磨面をつくりだしている。上下両端に敲打痕が認められる。2つに割れており、さらに内部にひびが不規則に入っていること、表面には全体に赤みがかっていることなどから、受熱石器と判断される。

磨石

23、24は磨石である。砂岩の扁平な円礫を選んで、その平坦な2面を磨面としている。23の表面には、褐鐵鉱が付着している。

凹石

25は、凹石である。安山岩のやや扁平な円礫を選んで、安定した平らな表裏2面に凹部をもつものである。1面は平らな面が磨面になっている。表面が場所によって、黒化したり、やや赤みがかっているので、受熱石器と思われる。

敲石

26は敲石である。安山岩の細長い円礫を選び、1端に敲打痕があり、そこから割れた剥離痕も認められる。半損しており、内部にも不規則なひびが広がっている。扁平な2面は磨面となっているので、磨石としても利用されたものである。

石皿

27、28は石皿である。いづれも安山岩の扁平な角礫を用いていて、平らな1面を磨面としている。破損しております。元は大きな石器であったと思われる。全体に淡く赤色を帯びており、受熱石器と推定される。29は石皿である。安山岩の大きな扁平な角礫を用いており、湾曲した磨面をもつ。

VII 平安時代の遺物

1 出土状況

上山桑A遺跡における平安時代の遺物は、計306点あります。おもに南1区と南2区から出土した。南1区では、IX D 7・8グリッドを中心にはば全体から土器片が多く出土したが、器形がわかる個体はみられず、小片がほとんどであった。遺構は未確認である。

南2区では、II I G 1グリッドとII J B 4グリッドを

中心に遺物が出土しているが、点数はごくわずかである。G 1では、ほぼ完形の土器が3点近接して出土した。約80cmの範囲に、土器3点が上向きで、この近くには長さ15cmほどの炭化材と一緒に出土したが、焼土や遺構は確認できなかった。

2 遺 物

土師器・壺

1・2は、ロクロ調整で、底部は回転糸切痕をそのまま残し、内面は未調整である。法量は、口径10.0~10.3cm、器高は3.0~3.5cmで、小形のものである。長野県教育委員会(1990)の壺A IIにあたる。

黒色土器・椀

3・4は、内面をヘラミガキし黒色処理したもので、底部には高台をつけナデ調整した椀である。3は、口径10.5cm、器口4.9cmで、土師器の壺とはほぼ同じ口径で、小形のものである。4は底部のみの破片である。

なお、これ以外の遺物は、すべて土器片である。遺物は土師器と黒色土器だけである。地区ごとの内訳をみると、南1地区271点中に黒色土器が38点(14%)、南2地区では19点中に黒色土器が4点(21%)であった。2地点ともに土師器が大部分で、黒色土器がわずかに混じるというほぼ同じ比率であり、ほぼ同時期のものと推定される。

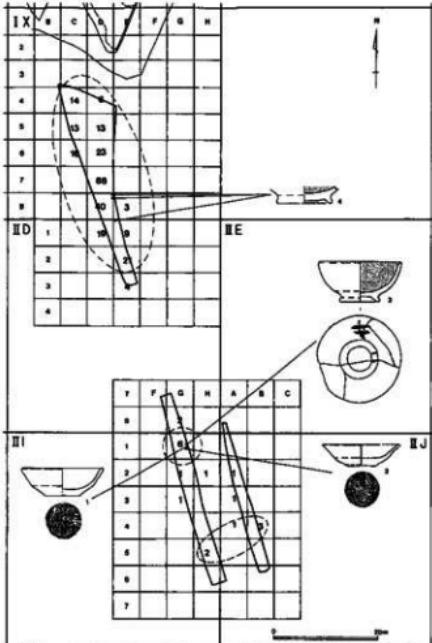


図22 上山桑A遺跡出土の平安時代土器の分布

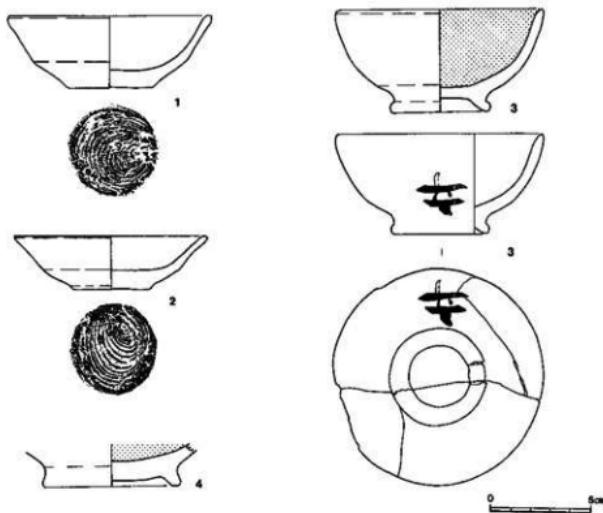


図23 上山桑A遺跡出土の平安時代の土器

表10 上山桑A遺跡出土の平安土器一覧

(単位: cm)

No	器種	口径	底径	器高	残存	遺物番号	成形・調整	備考
1	土師器 壱A	10.3	4.4	3.5	完形	98KYA IIIG1-34	回転糸切り	墨書き土器?
2	*	10.0	4.3	3.0	一部欠損	98KYA IIIG1-33	*	*
3	黒色土器 梗	10.5	5.0	4.9	ほぼ完形	98KYA IIIG1-36	内面ミガキ(ヨコ)、黒色処理	墨書き土器
4	*	(7.5)	6.9	(2.1)	底部のみ	98KYA I XD8-9, D8-49 98KYA IXE8-5	内面ミガキ、黒色処理、 回転糸切り	

墨書き土器

墨書き土器は1点である。3は「亥」というようにみえるが、どんな文字の一部分なのはわからない。ほかに1、2の内面には、墨痕とも思われる部分があるが、不鮮明で文字なのかどうか判読不能である。

わずかな土器点数ながら、墨書き土器の存在が確認されたことから、上山桑A遺跡の平安土器の集中地点(IIIG1グリッド)は、重要な意味のある場所だった可能性も考えられる。

3 所属時期

平安時代の遺物で器種・器形がわかるものはわずかである。長野県教育委員会(1990)および原(1988)の食器の15期区分にしたがって検討すると、次の通りである。

南2地区出土の壺Aはすべて土師器である。壺Aの法量は平均で口径10.15cm、器高3.25cmで、組成と法量から11期前後と推定される。また、黒色土器の梗は腰が強く

張る小形のもので、浅川西条遺跡18号住居址から三輪遺跡1号住居址の10期~12期ぐらいを特徴とするものである。これらの特徴から、点数が少なく即断はできないが、長野県教育委員会(1990)の11期、すなわち10世纪(900年代)の後半のものと推定される。信濃町の平安時代遺跡で報告されたものでは、丸谷地遺跡1号住居址(中村・中村、1994)と同時代と考えられる。

VII 信濃町の沈線文系土器

1 信濃町の沈線文系土器の種類

信濃町の縄文時代早期の遺跡では、押型文土器や条痕文系土器の存在は古くから知られていたが、最近になってその間の時期にあたる沈線文系の土器がいくつかの遺跡からまとまって出土し、これまで空白となっていた早期中葉の状況がだんだん明らかとなってきた。1993年調査の東裏遺跡（東裏団地地点）、1999年の東裏遺跡（町道柴山線地点、東裏団地の近く）（ともに中村、2004）、1996年の大道下遺跡（中村ほか、1997）、1998年の上山桑A遺跡（本報告書）、の4遺跡・地点である。これらの遺跡の土器から、信濃町の沈線文系土器の様相が明らかになってきたので、ここにその内容を整理したい。

土器製作の技術要素から、貝殻腹縁文を用いるもの（1類）、沈線文が主体となるもの（2類）、条線文（浅い並行沈線）が主体となるもの（3類）－という3区分ができる。

1類 沈線文と貝殻腹縁文が施された土器

文様構成からa種、b種の2種類がある。

2類 沈線文が施される土器

a種～e種の5種類がある。

3類 櫛歯状工具による条線文を施した土器を主体とするもの

a種～c種の3種類がある。

2 信濃町沈線文系土器の区分と編年

4遺跡・地点の土器群を整理すると、1類を中心とするグループと3類を中心とするグループの2群があることがわかる。これを新旧の2時期のものであると考えて、沈線文系土器のⅠ群、Ⅱ群とする。

沈線文系土器Ⅰ群：

沈線文と貝殻腹縁文が施された土器を主体とするもの

1類 沈線文と貝殻腹縁文が施された土器（図24）

a種 沈線でクランク状のモチーフをえがき、その内部に貝殻腹縁文を充填する土器。繊維をごく少量含んでいる。

主な遺跡：93東裏団地

b種 口縁にそって2条の沈線をひき、その下に沈線で左に傾いた梢円形の区画をし、その内部に貝殻腹縁文を沈線に平行に充填する土器。口縁上端には、貝殻腹縁文が斜めにつけられていて、口縁にそった沈線の頂部には、円形刺突文が加えられている。繊維はごく少量含まれている。

主な遺跡：98上山桑A遺跡

2類 沈線文が施される土器

a種 太い沈線文でカギの手状のモチーフをえが

き、内部に細い沈線を充填する土器。繊維をごく少量含んでいる。

主な遺跡：98上山桑A遺跡

沈線文系土器Ⅱ群：

櫛歯状工具による条線文を施した土器を主体とするもの。（図25・26）

3類 櫛歯状工具による条線文を施した土器

a種 櫛歯状工具による条線文で縦位に区画し、横位・斜位に条線をひき、空白部に櫛歯状工具で刺突を充填している土器。繊維を有～やや多く含む。（図25上）

主な遺跡：98上山桑A遺跡、96大道下、99東裏

b種 棒状工具による刺突が施される土器。繊維を有～やや多く含む。（図25下）

主な遺跡：98上山桑A遺跡、96大道下、99東裏

c種 櫛歯状工具による条線文のみが施される土器。口縁に刺突や刻みを施されるものもある。繊維を有～やや多く含む。（図26上）

主な遺跡：96大道下、99東裏

2類 沈線文が施された土器

b種 平行しない沈線で扇形などの文様が構成され

る土器。纖維を有へや多く含む。(図26中)

主な遺跡：96大道下、99東裏

その他の沈線文系土器(図26下)

まとまった出土がなく、客体的な存在と思われるグループである。位置づけについては不明の点が多い。

2類 沈線文が施された土器

c種 平行する沈線で、横位、縦位に区画し、その間に斜位の沈線をひく土器。纖維をやや多く含む。

多く含む。

主な遺跡：99東裏

d種 口縁に短沈線で矢羽模状の文様を施した土器。纖維を含む(有)。

主な遺跡：98上山桑A遺跡

e種 口縁に爪形の刺突列をつけ、その下に斜位の沈線をひく土器。纖維を含む(有)。

主な遺跡：99東裏

3 沈線文系土器Ⅰ群をめぐって

1a種(図24上)は、口縁部に沈線でクランク状のモチーフをえがき、その内部に貝殻腹縁文を斜位に充填する土器で、東裏田地でまとまって得られた。この土器は、貫ノ木遺跡(土屋ほか編、1998)で報告されているものであり、岐阜県根方岩陰遺跡(小林知生ほか、1967; 田中綱、1999)などにも類例が知られている。

1b種(図24中)は、口縁にそって2条の沈線を引き、その下に沈線で左に傾いた梢円形の区画をおこない、その内部に貝殻腹縁文で区画に平行に充填する土器である。口縁上端には、貝殻腹縁文が斜めにつけられていて、口縁にそった沈線の頂部には、円形刺突文が加えられている。このようなモチーフの土器は近隣には知られておらず、はじめて確認された土器である。文様のモ

チーフは、あえて比較すると、東北地方北部に分布する物見台式土器に共通する要素が認められる。曲線をえがくモチーフ、沈線の頂部に刺突を加えることなどである。反面、裏面に施文をおこなうという特徴などは、上山桑A遺跡では認められず相違する点である。

2a種(図24下)の太い沈線文でカギ手状のモチーフをえがき、内部に細い沈線を充填する土器は、1a種に共通するモチーフであり、太い沈線を使うことからも1a種の土器と併存するものと考えられる。纖維は含まれるが、量はごく少量である。田戸上層式併行と考えられる。1b種と1a種の関係は、今の時点では判断できないが、信濃町の沈線文系土器の中ではともに初期のものと考えられる。

4 沈線文系土器Ⅱ群について

櫛歯状工具による条線文が施される土器を3類とした。信濃町では最も多く見られる沈線文系土器である。

中でも、3a種(図25上)とした「櫛歯状工具による条線文で縦位に区画し、横位、斜位に条線をひき、空白部に櫛歯状工具で刺突を充填している土器」は、上林中道南遺跡(塙原ほか編、1996)、がまん淵遺跡(鶴田編、1997)などをはじめ、とりわけ山ノ内町、中野市、信濃町など北信地方に分布の中心がある土器と思われる。上林中道南遺跡の土器分析をおこなった中沢道彦氏は、上林中道南遺跡の「早期貝殻文沈線文系Ⅲ群」土器について、「櫛歯状工具による条線文が卓越すること」、そして「判ノ木山西遺跡早期第3・4類」と比較して、「条線の条が

短く、横、斜方向の施文が多い」という点に注目して、早くから北信地方の土器の特色・独自性を指摘されていた(会田進・中沢道彦、1997)。

また、最近、新潟県下でも中郷村八斗蔭原遺跡(坂上、2004)、川口町西倉遺跡(佐藤・倉石、2003)などで、その存在が報告されている。

3c種(図26上)とした大道下遺跡、東裏遺跡出土の「櫛歯状工具による条線のみが施される土器」は、類例があまりみられないものである。

3類および2b種(図26中)はほぼ同時期のものと考えられ、胎土には纖維を含んでいるがそれほど多くはない。2c種(図26中)の時期については不明である。

5 2 d種、2 e種土器（図26下）について

2 d種は、肥厚した口縁に短沈線で矢羽根状の文様を施したもので、上山桑A遺跡の1点のみである。阿部（1997）が下荒田遺跡と判ノ木山西遺跡をつなぐ存在だとした長野県望月町平石遺跡の土器（福島、1989；阿部、1997の第7図）に類似するものである。平石例にみられる連続押引文は伴わない。

2 e種は、口縁に爪形の刺突列をつけ、その下に斜位の沈線をひく土器で、1999年東裏遺跡資料に4点があ

る。口縁付近は矢羽根状のモチーフとなり、若干、施文方法が異なるが、上述の2 d種に類似する特徴を持ち、平石例に関連した土器と考えられる。

信濃町地域でこれらの土器が単独で存在するのか、ほかのどの資料と共に伴するのかは、未確認である。平石遺跡の土器は、前述の3類の土器よりは先行するものと考えられている（阿部、1997など）。

6 沈線文系土器群の確認の意義

今回、信濃町内出土の沈線文系土器が大きく、2段階のものがあることが判明した。長野県内では、この時期の土器群について、1997年の長野県考古学会縄文時代（早期）部会編（1997）のシンポジウムで、近隣地域も合わせて土器様相についての紹介がおこなわれ、注目を集めようになつた。その段階では、信濃町地域の資料の存在が報告されていなかった。シンポジウムでは、おもに長野県東部や諏訪地方の資料の分析が論拠になつていて、山ノ内町の上林中道南遺跡などの北信地方の土器の位置づけについては、必ずしも解明されたとは言い切れない面を残していた。上山桑A遺跡、東裏遺跡、大道下遺跡でえられたまとまった沈線文系土器群は、同一地域内における土器の変容過程を研究する上では、重要な資料になると思われる。

新潟県では「早期中葉（は）沈線文系（貝殻沈線文系）土器群の段階、主に東北地方南部や関東地方の影響を受けながら変遷する」（小熊博史、1999）とされる特徴が、信濃町でも当てはまると思われる。ただし、今のところ、新潟県室谷洞窟上層でみられるような太い沈線文などを用いた田戸下層式などのより古い時期の沈線文系土器群の存在は認められない。

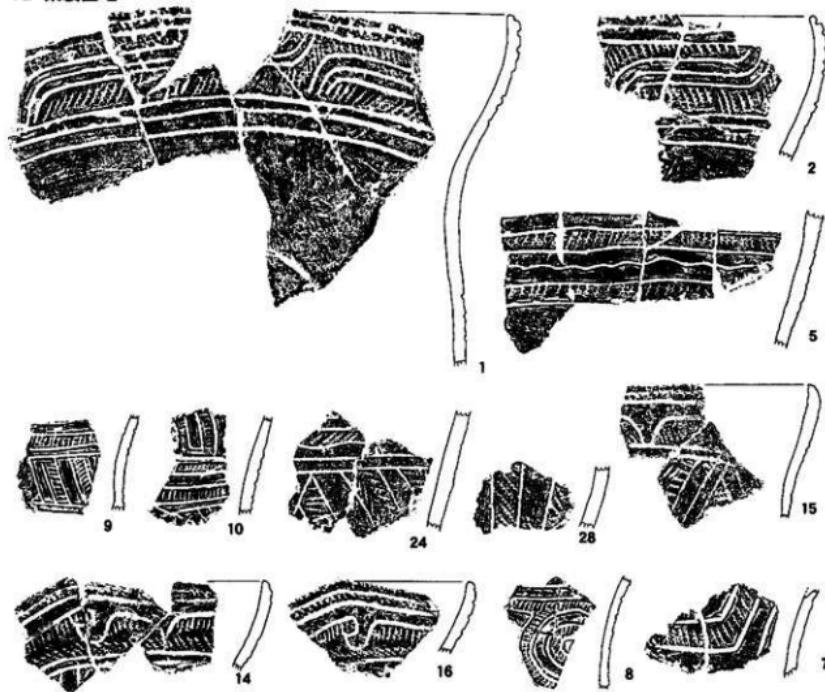
信濃町で認められた沈線文系土器の変遷は、「田戸上層式後半段階に併行する資料として、貝殻文を特徴とする」資料であり、「田戸上層式終末段階から子母口式に対比される、刺突紋、沈線紋が集合状に施紋される」ととらえる小笠原永隆氏の編年観（小笠原永隆、1999）の2

段階に相当すると理解される。

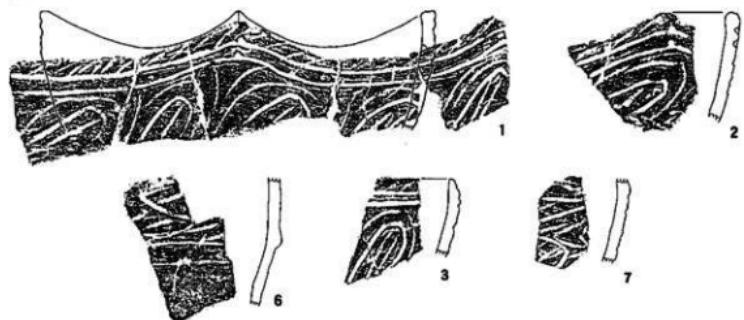
さらに、当地域では、沈線文系土器群に先行する押型文土器を出土する遺跡が大変多く、中でも、市道遺跡（中村、2000）、大道下遺跡（中村、1997）、そして塞ノ神遺跡（ 笹沢・小林、1966）などでは、この地方の押型文土器の最も新しい形式と考えられている「塞ノ神式土器」（千曲川水系古代文化研究所編、1980；会田、1988）が多く出土している点である。市道遺跡ではⅠ群立野式、Ⅱ群横沢式（沢式を含む）、Ⅲ群細久保式、Ⅳ群塞ノ神式という押型文土器のこの地域における全型式がそろつており、また、大道下遺跡では同様に押型文Ⅰ群～Ⅳ群とともに沈線文系土器Ⅱ群が出土している。押型文土器の最終末と考えられている高山寺式や相木式土器が信濃町を含むこの地域で未確認であることからも、信濃町の押型文土器群と沈線文系土器群の相互の関係は、縄文時代早期の土器編年研究にとって極めて重要な問題を内在しているように思われる。

市道遺跡や本報告書で縄文時代早期の土器群の編年關係に関する新しい資料を提示することができたが、信濃町地域の縄文時代遺跡ではこれまで住居址等の遺構が一切伴わず、包含層出土の土器だけしか得られていないので、この点土器群の一括性という観点では、制約下にあることは言うまでもない。

1a 東裏団地



1b 上山桑A

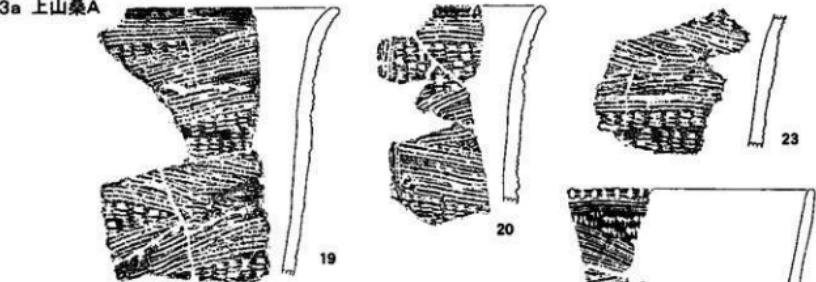


2a 上山桑A

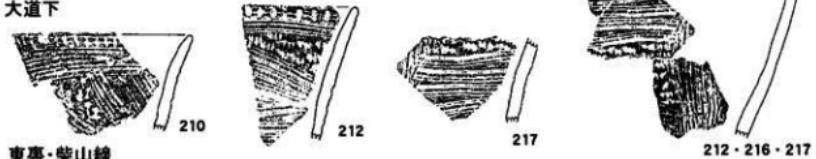


図24 信濃町の沈線文系土器 1 1群 (1a、1b、2a) 遺物番号は原報告による

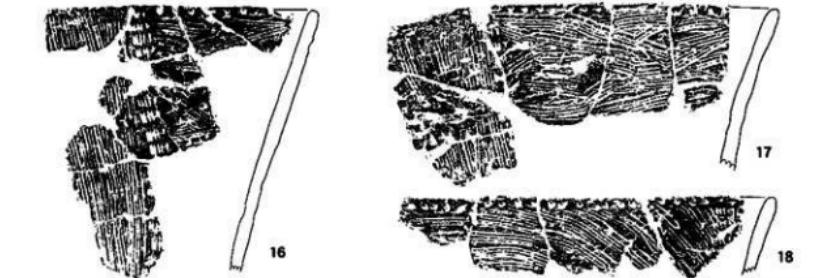
3a 上山桑A



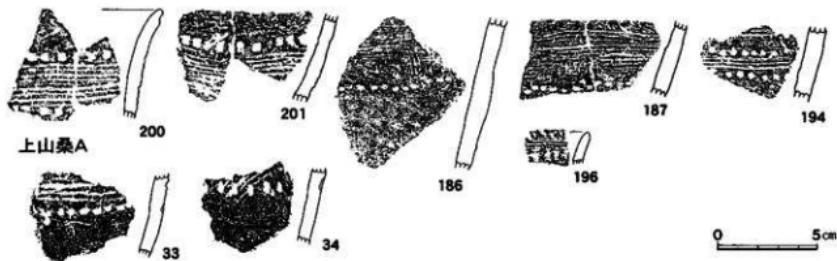
大道下



東裏・柴山線



3b 大道下



上山桑A

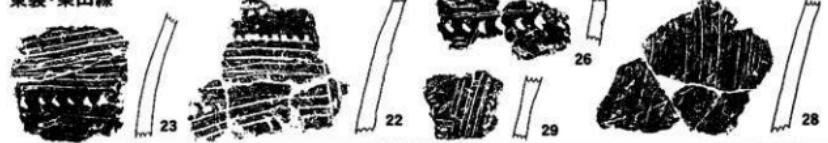
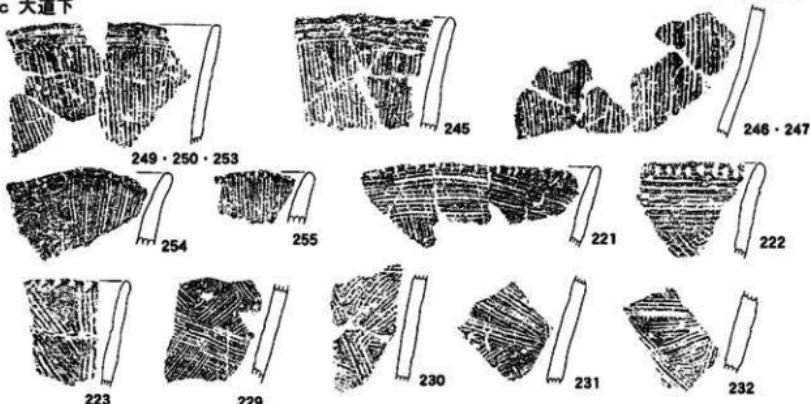


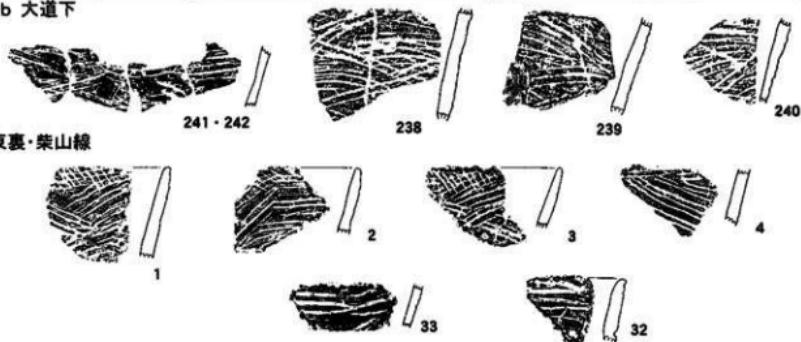
図25 信濃町の沈線文系土器2 II群 (3 a - 3 b)

3c 大道下



東裏・柴山線

2b 大道下



東裏・柴山線

2c 上山桑A



2e 東裏・柴山線



図26 信濃町の沈線文系土器3 II群 (3c・2b)・その他 (2c・2d・2e)

VIII 沈線文系土器群の胎土研究による分析と検討

1 土器胎土研究法

遺跡から出土した土器の全点について、非破壊で実体双眼顕微鏡により土器胎土の詳細な観察・記載をおこない、とくに砂粒の混入量・組成と繊維混入量を統計処理して、土器群の相互関係を比較する胎土研究法は、市道遺跡の報告書ではじめて提唱したものである（中村、2001-2002）。まとまった分析例は、市道遺跡の縄文時代早期・前期のものだけであったが、今回、この手法を用いて信濃町内の沈線文系土器などを検討した（図27、表11）。また、大道下遺跡（中村、1997）については、胎土記載がおこなわれていなかったので、今回あわせて実施し、その結果は表12に掲載した。なお、中村（2001）では、繊維量については、繊維を含む土器点数の比率を用いていたが、たとえ少量づつでも、繊維が多く土器に含まれている場合には、繊維土器の割合が高いことをアピールするにはいいが、繊維分の絶対量を反映しないという問題点があった。そのため、今回は繊維混入量を使うこととした。

観察方法は、①実体双眼顕微鏡の10~20倍で土器の表

面（特に文様のない裏面が観察しやすい）を検鏡し、砂粒分の混入の度合いを「ない、少ない、含む（有）、やや多、多い」の5段階に分けて記録する。②次に、砂粒の鉱物や岩石の種類を鑑定して、それを多いものから記録し、③最後に繊維を含むかどうかを砂粒と同じ5段階に分けて記録する。この際、中間段階のものは「有～やや多」というように0.5きざみの中間値を取る。④その後、統計処理をする際には、ない（0）、少ない（1）、有（2）、やや多（3）、多い（4）という数値に置き換え、これを累計し総数で割った数字、すなわち土器種類ごとの砂粒と繊維の混入量の平均値を求め、土器群ごとの比較検討をおこなうという方法である。なお、この際に一般的な数値と異なる土器がある場合は、土器の文様や胎土の感じを再度見直すことにより、同一の土器群のものか否かを検討することもできる。

このように求めた土器胎土の数値化した特徴を、散布図グラフ（図27）に表した。以下に、その結果と考察をおこなう。

2 沈線文系土器群の胎土の特徴

上山桑A遺跡（図27-1）と東裏遺跡（図27-2）では、沈線文I群の1a、1bと2aが砂粒（1~1.5）、繊維（0.5~0.75）とともに少ない数値を示す。これに対して、沈線文II群の土器は、砂粒（1~2.313）、繊維（1.5~2.75）ともに高い中間的な領域にあり、I群とは明確に分離されることがわかる。大道下遺跡（図27-3）の沈線文系土器（II群）も、同様な傾向を示している。東裏遺跡にある沈線文系土器その他とした2c、2eは、この領域よりは少し外側にあり、II群とは区別されるもの

かもしれない。一方、2eと関係があると考えた上山桑A遺跡の2d（平石遺跡類似資料）は、II群の範囲内に位置している。

沈線文II群とその後の条痕文系土器との関係は、上山桑A遺跡でみると、朝ヶ島台式併行の条痕文1、2およびその他はともに、沈線文系の領域より外側の数値が大きい方にシフトしていることがわかる。このように、文様の形態的に区分した土器分類は、胎土の研究からもグループングが妥当であることが支持される。

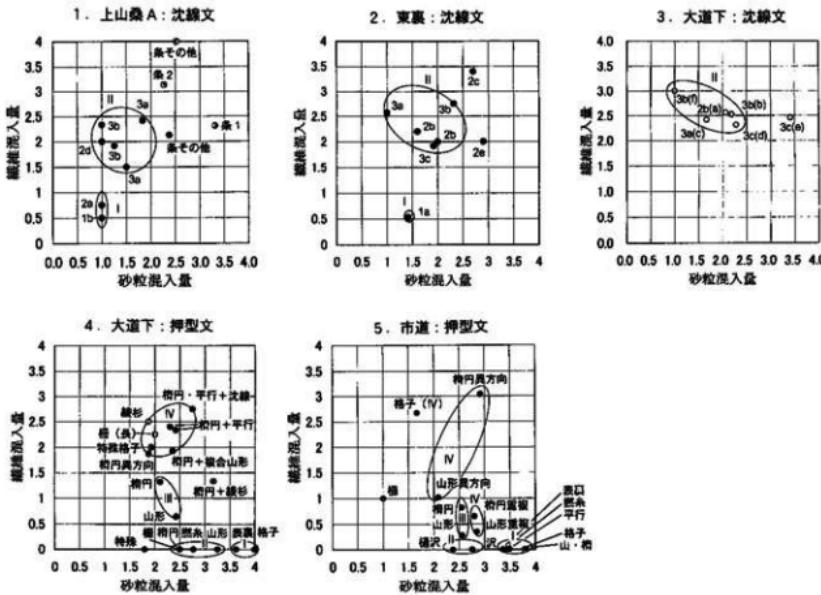


図27 信濃町における沈線文系土器・押型文土器の胎土中の砂粒・繊維混入量

表11 信濃町における縄文早期土器の胎土中の特徴

上山鼎▲	種類	番号	点数	専用選入品	総選入品
1	b	1~15	15	1.0	0.5
2	a	16, 17	2	1.0	0.75
2	d	18	1	1.0	2.0
3	a	19~24	6	1,833	2,417
3	a	25~26	4	1.5	1.5
3	b	33~38	6	1.25	1,917
3	b	39~32	3	1.0	2,333
秦文	1	39~46	8	3,313	2,313
秦文	2	47~51	15	2,267	3,153
秦文その他		62~82	21	2,524	4,0
秦文その他		83~86	4	2,375	2,125

東疆追蹤：東疆高地·柴山

種類	番号	点数	秒数回数	秒速回数
1a	1~31	31	1,419	0,532
2b	1~4	4	2,0	2,0
2c	5~9	5	2,9	2,0
2e	10~14	5	2,9	2,0
3a	15~21	7	1,0	2,571
3b	22~29	8	2,313	2,75
2b	30~34	5	1,6	2,2
3c	35~40	6	1,917	1,917

市道四號

地 種	番 号	点 数	秒 间入息	標準秒入息
I 山形文	種円文	16	3.81	0
I 條子目文		105	3.79	0
II 平行線文		61	3.49	0.008
II 鶴文		22	3.45	0
II 表裏鶴文		64	3.36	0
II 藤式文		13	2.38	0
II 乱文		17	2.76	0
III 正久保山形文		39	2.56	0.28
III 正久保藤円文		56	2.55	0.82
IV 燕形文		1	1.0	1.0
IV 正久保山形文		13	2.85	0.35
IV 正久保藤円文		15	2.8	0.65
IV 正久保山形文		13	2.92	3.04
IV 正久保藤円文		33	2.09	1.62
IV 鶴子目文		3	1.67	2.67

種類	番号	点数	歩数登記日	識別登記日
Ⅲ山形文・帯状	1~8	8	3.25	0
Ⅲ椿円文・帯状	9~13	5	2.5	0
Ⅲ格子目文	14~15	2	4.0	0
Ⅲ幾彌縄文	16~19	4	3.625	0
Ⅲ・鳥刺文	20~30	11	2.775	0
Ⅲ山形文・波形	34~47	14	24.29	0.643
Ⅲ椿円文・波形	48~108	61	2.107	1.32
Ⅳ椿円文・萬葉文	109~112	4	1.875	1.875
楕状文	113~119	7	2.5	0
楕状文(長・短原体)	120~121	2	2.0	2.25
Ⅳ椿葉名字目文	122~128	7	1.929	2.0
Ⅳ波紋状文	129~136	8	1.875	2.5
Ⅳ椿円文・平行線文	142~147	6	2.417	2.333
Ⅳ椿円文・複合山形文	148~154	7	2.357	1.929
Ⅳ椿円文・波紋状文	155~157	3	3.167	1.333
Ⅳ平行線文・複合山形文	158	1	1.5	1.0
Ⅳ椿円文・平行線文	159	1	1.0	3.0
Ⅳ椿円・平行線文・沖縄文	160~163	4	2.75	2.75
Ⅳ椿円・平行線文	164~168	5	2.3	2.4
特殊な押闇文	137~141	5	1.8	0
比規文3 b (f)	186~189	4	1.0	3.0
比規文3 b (b)	191~209	19	2.184	2.526
比規文3 a (c)	190, 210~220	12	1.667	2.417
比規文3 c (d)	221~236	16	2.281	2.313
比規文3 c (e)	245~255	11	3.409	2.455
比規文2 b (a)	227~244	9	2.063	2.563

砂粒・礫混集は、とともに実体双眼鏡をもちいた観察により、下のように4段階に分け、それを0~4に数値化し、土器形式・種類ごとの平均値をもとめ表にした。

各個の土器の数値は、それぞれの土器一覧の中に段階名（やや多いなど）で示した。また中間的なものは、「有・やや多い」(25)などと示した。

なし	少	有	やや多	多い
0	1	2	3	4

3 押型文土器群の胎土と沈線文系土器群の関係

信濃町では沈線文土器の直前型式として、押型文土器が多くの遺跡で出土している。押型文土器と沈線文土器の関係については、早期土器の編年上の問題が指摘されている（岡本、1989、1992）ので、この点を検討したい。今回、大道下遺跡の押型文土器について、全点の胎土観察をおこなった（図27-4）。その結果、市道遺跡で立野式とした押型文I群に属す格子目文と表裏繩文土器、横沢式に属す押型文II群の帯状施文の山形文、橢円文土器は、ともに纖維混入量は0で、砂粒は前者が多く、後者がある（2.5~4）領域にある。

細久保式に属す密接施文の橢円文、山形文の土器などの押型文III群は、砂粒が有（2）で、纖維が0.6~1.3（少ない）に領域を持つ。塞ノ神式とされる重複施文や異種文様並列の押型文土器からなるIV群は、砂粒、纖維とともに2~3の領域にある。

全体的な胎土数値の傾向は、市道遺跡（図27-5）の結果と一致するが、細部についてみると、IV群に数値の若干のばらつきが見られる。市道遺跡の段階での胎土記載は、鑑定の仕方もまだ萌芽的な段階にあり、一部については、今回おこなった見方で再測定しなおす必要があるものもある。特に、市道遺跡でIII群とIV群の中の重複施文の一群の差が少なかったことは、市道報告書作成時からの問題点であったが、大道下では明確な差異が認められており、この点については再検討が必要である。

III群の細久保式は、纖維を全く含まないものからやや多く含むものまで存在し、I~IV群の中では胎土の個体差が最も大きい。III群としているのは、山形文、橢円文の密接施文のもののみをグルーピングしている。全く含まない（0）ものでは、I群立野式に近似したものも市道遺跡で確認されている。

纖維量の変化が起こる時間と、実際の土器が存続し次の形式に移り変わっていく時間の対応は、1:1の対応、すなわち正比例の関係ではなく、変化するときは加速度的に増えているだろうという予測がされる。このため、纖維量の変化が大きいから継続期間も長かっただろうということにはならず、実際の時間は見かけほどではないことが考えられる。このように考えると、III群細久保式については、纖維混入量だけではこのグループを規定で

きないという土器胎土研究法の限界を示している。

信濃町の押型文土器と沈線文系土器の土器胎土から見た対応関係は、以下のようになる。

纖維含まない	押型文III群	細久保式（前半）
わずかに含む	押型文III群	細久保式（後半）
	～沈線文I群…田戸上層式	
纖維を含む	押型文IV群	塞ノ神式
	～沈線文II群…田戸上層式（新々）	
	～子母口式	

全体としてみると、押型文IV群と沈線文II群が重なる領域にあることが注目される。

沈線文I群は、砂粒量は異なるが、纖維混入量だけを見ると、ほぼ押型文III群（細久保式）の範囲に入るものである。縄文時代早期後半から前期初頭にかけて、土器胎土中に纖維が増えることはよく知られているが、その具体的な内容は十分には解明されているわけではない。仮に土器群の違いに關係なく、纖維混入の変化がある程度広域的に、漸一的な現象だったと仮定すると、細久保式=沈線文I群、塞ノ神式=沈線文II群という対応関係が想定されることになる。同一地域内での変遷期の土器群の相互關係について、土器系統が異なるということだけでかたづけず、土器の胎土は土器製作の土台となった技術基盤を反映している重要な情報があるので、考慮すべき点であると思われる。主に中部地方以西に分布する押型文土器の時期については、縄文時代早期の標準編年が確立されている関東地方の撚糸文系土器群や沈線文系土器群との関係が、まだ十分には解明されていない問題となっている。

もし、上山桑A遺跡などの信濃町の遺跡におけるこの土器胎土の併行関係が成り立つものとするならば、従来、一般に考えられていたより、押型文土器の後半期は新しい時期に属すこととなる。この点については、今回土器胎土だけで検討した見解であるので、他の要素から見ると問題点を内在しているかも知れない。また、中村（2001）では市道遺跡の押型文I群立野式と表裏繩文土器の密接な関係（同時期説）をとなえ、信濃町地域の押型文土器の初瀬は古いものであると考えたことと、今回のIII群細久保式、IV群塞ノ神式を随分新しく見ることもで

きるとした見解は、一見矛盾するかもしれない。しかし、このことの正否について、にわかには判定を下せないので、今の時点では明らかになった事実とそれに対する解釈について、ありのままに記しておくことにする。

そして、もう1点は、胎土中の纖維量の変化は、土器群ごとに、あるいは地方ごとに差異があったと考えるのか、あるいはもう少し普遍性をもった現象だったのか－この点を検討する必要があると思われる。

表12 大道下遺跡（4次）の绳文早期土器の粘土の砂粒・礫雜混入量一覧（信濃町教委1997 P26~31に補足）

要7 (PZ3) と同じ

IX まとめ

平成10年度の一般県道杉の沢黒姫（停）線改良工事に伴う上山桑A遺跡の発掘調査では、以下の点が明らかになった。

1) 上山桑A遺跡は、黒姫山の東北麓にあり、山体部のすぐふもと、山麓部の最上位に位置する縄文時代早期、前期と平安時代の遺跡である。信濃町域のJR信越本線より西側の黒姫山麓では、考古学的調査が從来あまりおこなわれておらず、考古学情報が希薄な地域であった。

2) 上山桑A遺跡は、県道の改良のために調査されることになり、道路ルートが変更になり全域を発掘した北地区と、駒爪川をはさんで道路の拡幅部分のみを発掘した南地区（南1区・南2区）に調査区域が分かれる。

北地区は駒爪川に沿った丘陵状の高台で、やや強い傾斜をもつ地形面で、崖鑿性の細礫～巨礫が多数混入する地質条件の場所である。これに対して、南地区は後期更新世末以降、風成堆積物のみがたまる安定した地質条件の場所であったことがわかる。

3) 発掘調査では、縄文土器736点、石器267点、平安時代土器303点、大正12年の錢貨1点、近現代陶磁器27点、取り上げた自然礫・炭化物など122点で、総計1,459点の出土遺物を得た。

北地区には、縄文時代早期中葉～前期末の遺物が多く出土した。南1区には、縄文時代前期中葉と平安時代の遺物が、南2区には、縄文時代早期中葉、前期後葉および平安時代の遺物が出土した。いずれの時期の文化層にも、遺構は未確認であった。

4) 縄文時代早期中葉の沈線文系土器がまとまって出土したことは特筆される。上山桑A遺跡で沈線文系土器I群とした、沈線文と貝殻痕縁文を施された土器は、中部地方ではほかに類例が見つからない初見となる資料であり、この土器については今後の調査検討に期待される。

沈線文系土器II群とした、櫛齒状工具による条線文が施された土器は、信濃町では上山桑A遺跡のほか、大道下遺跡、東裏遺跡東裏田地地点、東裏遺跡町道柴山線地点でも出土しており、北信地方に分布の中心をもつ在地的な土器だと思われる。

5) 縄文時代早期後葉の条痕文系土器では、鶴ヶ島台式併行など、3時期の土器が確認された。

6) 縄文時代の石器には、石鎌、スクレイパー、クサビ形石器、石斧、特殊磨石、磨石、凹石、敲石、石皿などがあった。石器組成や内容は、信濃町の市道遺跡、大道下遺跡に近いものであり、特に特殊磨石の存在など、縄文時代早期的な石器群の内容が見られる。

7) 平安時代の遺物は、器形がわかる土器4点がある他は、破片が散在した状況にあったので、遺跡の性格等は不明である。坏の形態・法量からは、10世紀（900年代）後半のものと推定される。

8) 本発掘では、縄文時代早期中葉の沈線文系土器群について、新旧2時期の存在が明らかになった。これまで長野県北部から新潟県境界部では、早期中葉の土器変遷について不明の点が多かったので、上山桑A遺跡の成果は大きな意味をもつ。

上山桑A遺跡の発掘成果により、この地域の沈線文系土器群の内容、変遷に見通しがついたので、本報告書では、未報告となっていた東裏遺跡の資料も含めて、信濃町地域の沈線文系土器群の編年について論述した。

9) 縄文時代早期の沈線文系土器群および押型文土器について、土器胎土の詳細な検討をおこなった。その結果、沈線文土器I群とII群は砂粒・纖維の混入量から明確に分離でき、さらに前者は押型文土器の細久保式（押型文II群）に、後者は塞ノ神式（押型文IV群）にそれぞれ対応する可能性があることが判明した。

引用文献

- 会田 進(1988) 中部山岳地方押型文文化の様相、長野県を中心に、帝塚山考古学研究所編「縄文早期を考える、押型文文化の諸問題」344-374P.
- 会田 進・中沢道彦(1997) シンポジウム開催にあたって、中部高地の早期中葉土器編年上の課題、長野県考古学会縄文時代(早期)部会編、シンポジウム「押型文と沈線文」、215-229P.
- 阿部芳郎(1977) 判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年、長野県考古学会縄文時代(早期)部会編、シンポジウム「押型文と沈線文」、215-229P.
- 井上春雄(1962) 信濃川河系にそそう疊層堆積地形とその意義(その3)、信州大学教育学部紀要、12、167-181P.
- 小笠原永隆(1999) 中部地方を中心とする縄文時代早期中葉土器編年の展望、「シンポジウム」の再検討を中心とした若干の予察、長野県考古学会誌、87・88、63-78P.
- 岡本東三(1989) 立野式土器の出自とその系統をめぐって、先史考古学研究、第2号、91-118P.
- 岡本東三(1992) 埼玉県・大原遺跡第3類土器をめぐって、人間・遺跡・遺物—わが考古学論集2、発掘者談話会、101-130P.
- 小熊博史(1999) 早期、新潟県考古学会編「新潟県の考古学」73-80P.
- 小林知生・早川正一(1967) 岐阜県根方岩陰、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編「日本の洞穴遺跡」175-188P.
- 坂上由紀編(2004) 八斗森原遺跡、上信越自動車道関係発掘調査報告書、X I、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財事業団、56P.
- 笠沢 浩・小林 手(1966) 長野県上水内郡信濃町寒ノ神遺跡出土の押型文土器、信濃、18.4号、265-272P.
- 佐藤雅一・倉石広太(2003) 西倉遺跡第3次発掘調査報告書、農林漁業用揮発油財源身替農道整備事業に伴う発掘調査報告書、川口町教育委員会、50P.
- 田中 純(1999) 中部地方における縄文早期沈線文土器群の終末について、関東以西における早期前半から後半への移行期の問題、長野県考古学会誌、87・88、26-62P.
- 堀原長則はか編(1996) 上林中道南遺跡Ⅲ、山ノ内町教育委員会、144P.
- 千曲川水系古代文化研究所編(1980) 編年、中部高地における形式、旧石器・縄紋・弥生編、千曲川水系古代文化研究所、209P.
- 土屋 積・中島英子編(2000) 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、16、信濃町内その2、星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ栗・普光寺、縄文時代~近世、長野県埋蔵文化財センター。
- 豊野層団体研究グループ(1969) 信濃川流域の第四系、日本の第四系、地団研專報、15、201-216P.
- 長野県教育委員会(1990) 松本市内その1、総論編、中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書、4.
- 長野県考古学会縄文時代(早期)部会編(1997) シンポジウム「押型文と沈線文」229P.
- 中村由克(1988) 柏原の原始をさぐる、長野県上水内郡信濃町「柏原町区誌」117-145P.
- 中村由克・中村敦子(1994) 丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書、平安時代住居址・押型文土器の遺跡、信濃町教育委員会、78P.
- 中村由克ほか編(1997) 大道下遺跡(4次)ほか信濃町内遺跡発掘調査報告書、押型文土器と平安時代の遺跡、信濃町教育委員会、89P.
- 中村由克(2000) 市道遺跡発掘調査報告書、押型文土器と諸穀b式・c式併行期の遺跡、信濃ゴルフクラブ用地内の遺跡、信濃町教育委員会、310P.
- 中村由克(2002) 押型文土器(縄文早期)の胎土からみた産地の推定—長野県市道遺跡例の検討、日本第四紀学会講演要旨集、32、100-101P.
- 中村由克(2004) 東裏遺跡東裏団地地点・町道柴山線地点発掘調査報告書、信濃町教育委員会。
- 土屋 積ほか編(1996) 一般国道(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書、貫ノ木遺跡・西岡A遺跡、長野県埋蔵文化財センター、114P.
- 名久井文明(1981) 貝殻文尖底土器、加藤香平ほか編「縄文文化の研究」3、85-95P.
- 原明芳(1989) 長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相、長野県埋蔵文化財センター紀要、2、25-53P.
- 福島邦夫(1989) 平石遺跡、望月町教育委員会



1 北地区の発掘（北側より）



2 北地区 土器集中部（南より）



3 北地区 土器集中部（南より）



4 北地区 砿の出土状況



5 北地区 遺物の出土状況



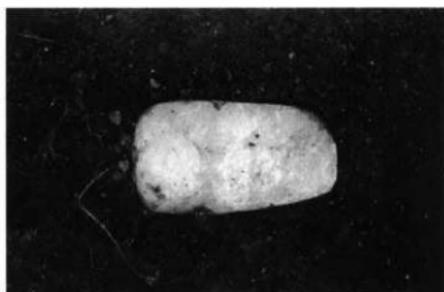
6 北地区 包含層の下部の状況



7 北地区 試掘調査



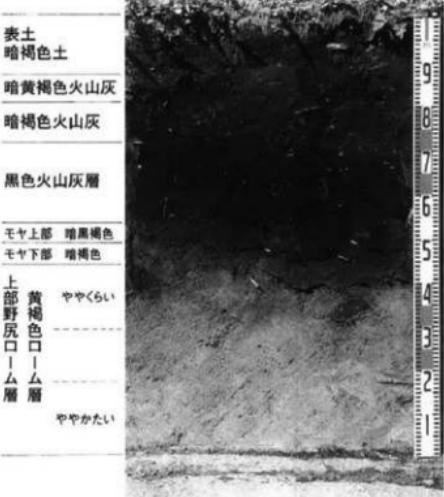
8 北地区 石斧の出土状況



9 鋸製石斧



10 北地区的地層



11 南2区の地層



12 南1区の遺物出土状況（北側より）



13 南1区の発掘



14 南1区の試掘調査（南側より）



15 南1区の試掘調査（南側より）



16 南1区北方の試掘調査



17 南2区の全景



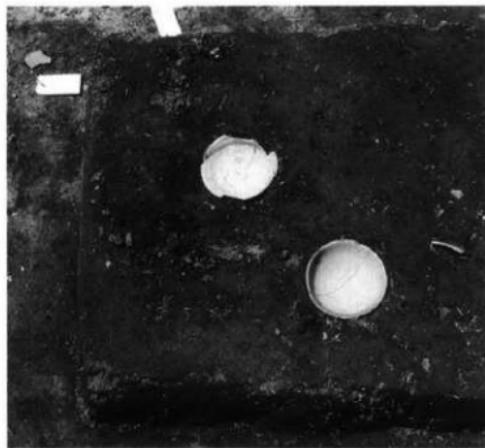
18 南2区 遺物の出土状況



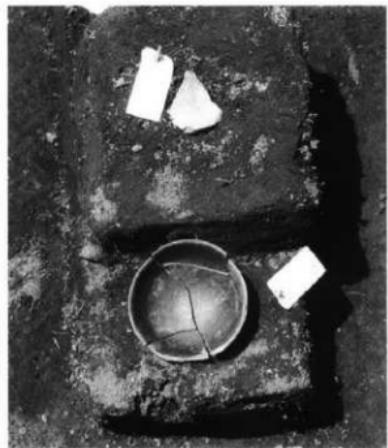
19 南2区 遺物集中部の発掘



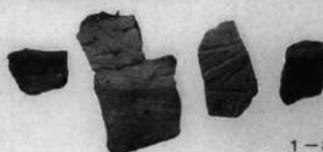
20 南2区 完掘風景



21 南2区 土師器の出土状況



22 南2区 黒色土器



1-8



裏面



9-15



16・17



18



裏面

0 5cm

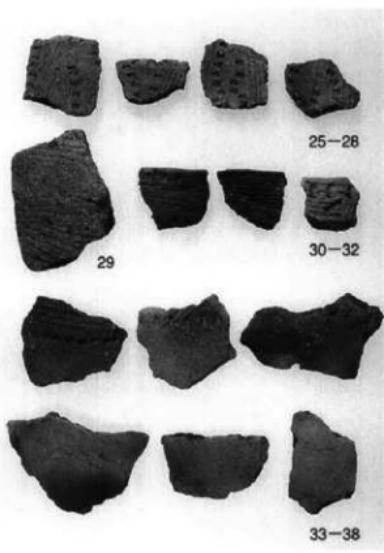
縄文土器 I 早期・沈線文系土器 I 1-b (1-15), 2-a (16・17), その他 2-d (18)



19-24



裏面

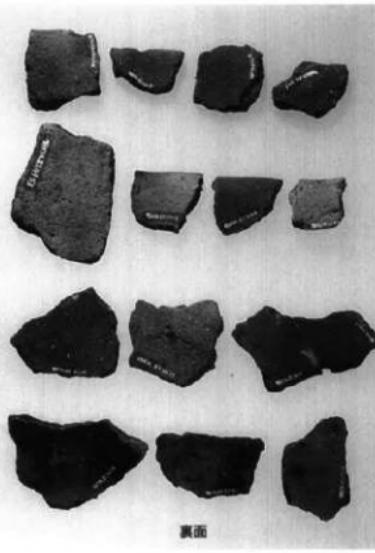


25-28

29

30-32

33-38



裏面

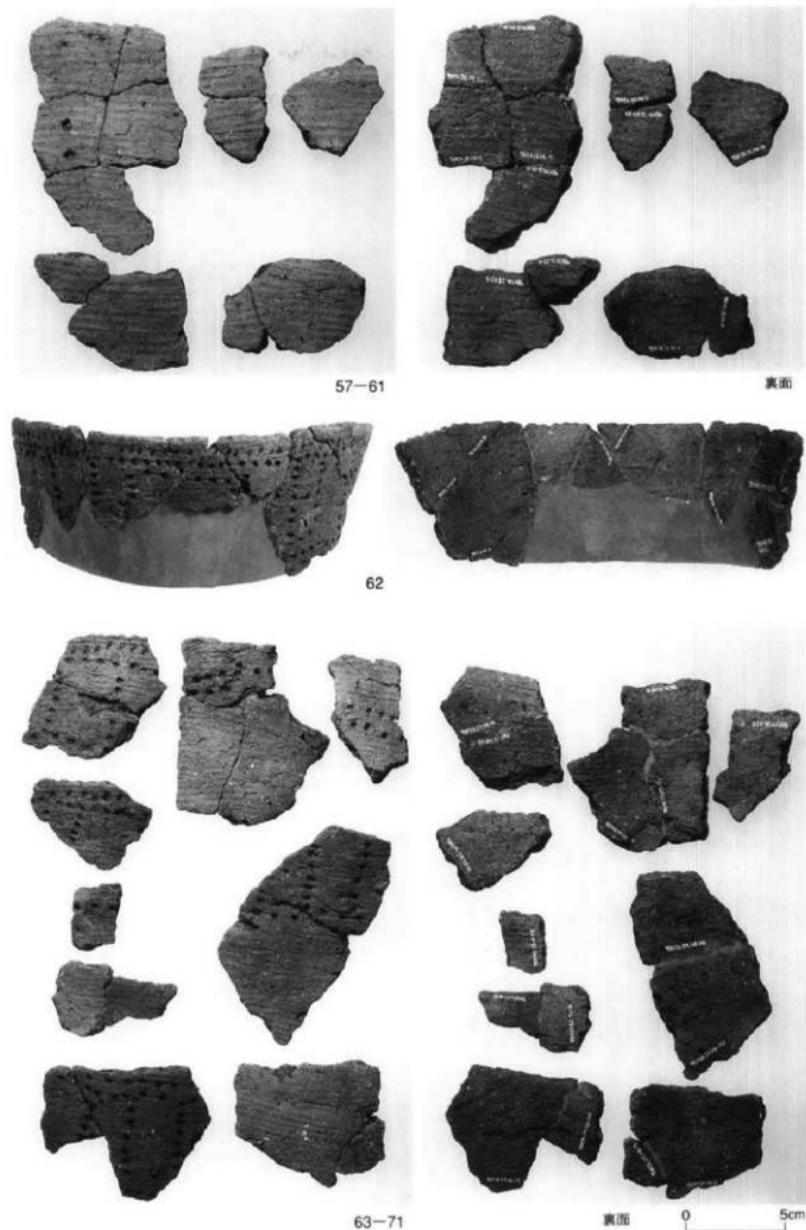
0 5cm

縄文土器 2 早期・沈線文系土器 II 3-a (19-29)、3-b (30-38)

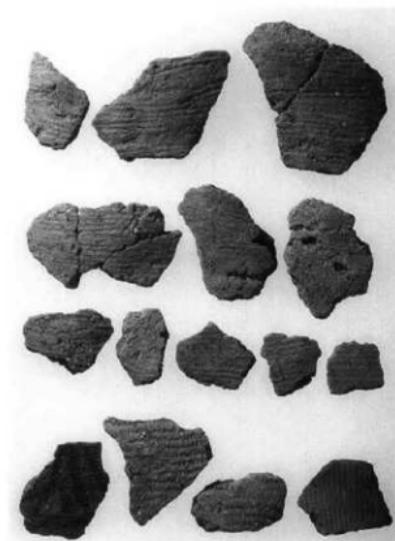


0 5cm

縄文土器 3 早期・条痕文系土器 1 (39-46)、2 (47-56)



縄文土器 4 早期・条痕文系土器 2 (57-61)。その他 (62-71)

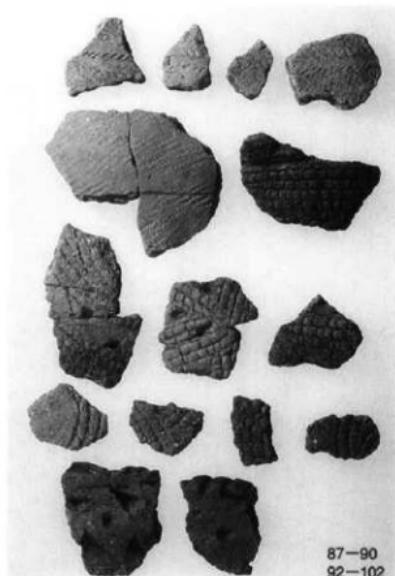


72-86



裏面

0 5cm



87-90
92-102

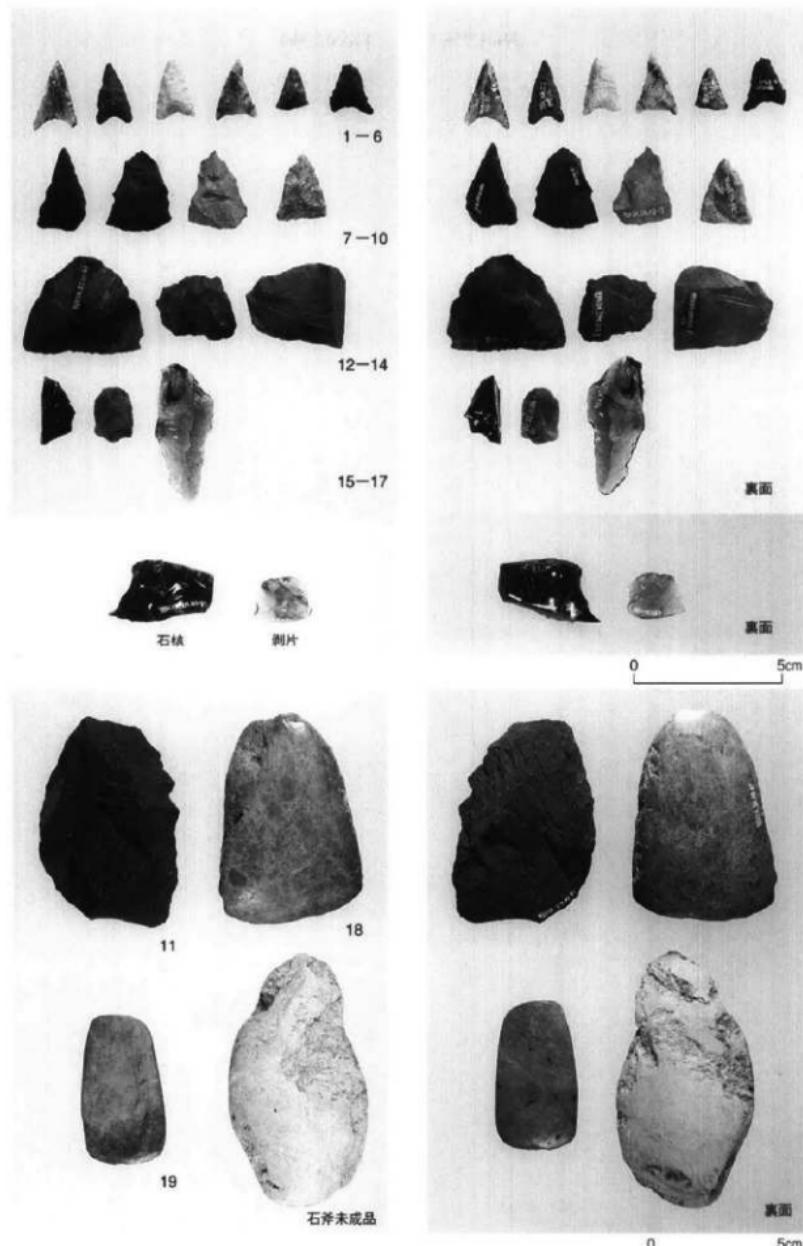
0 5cm



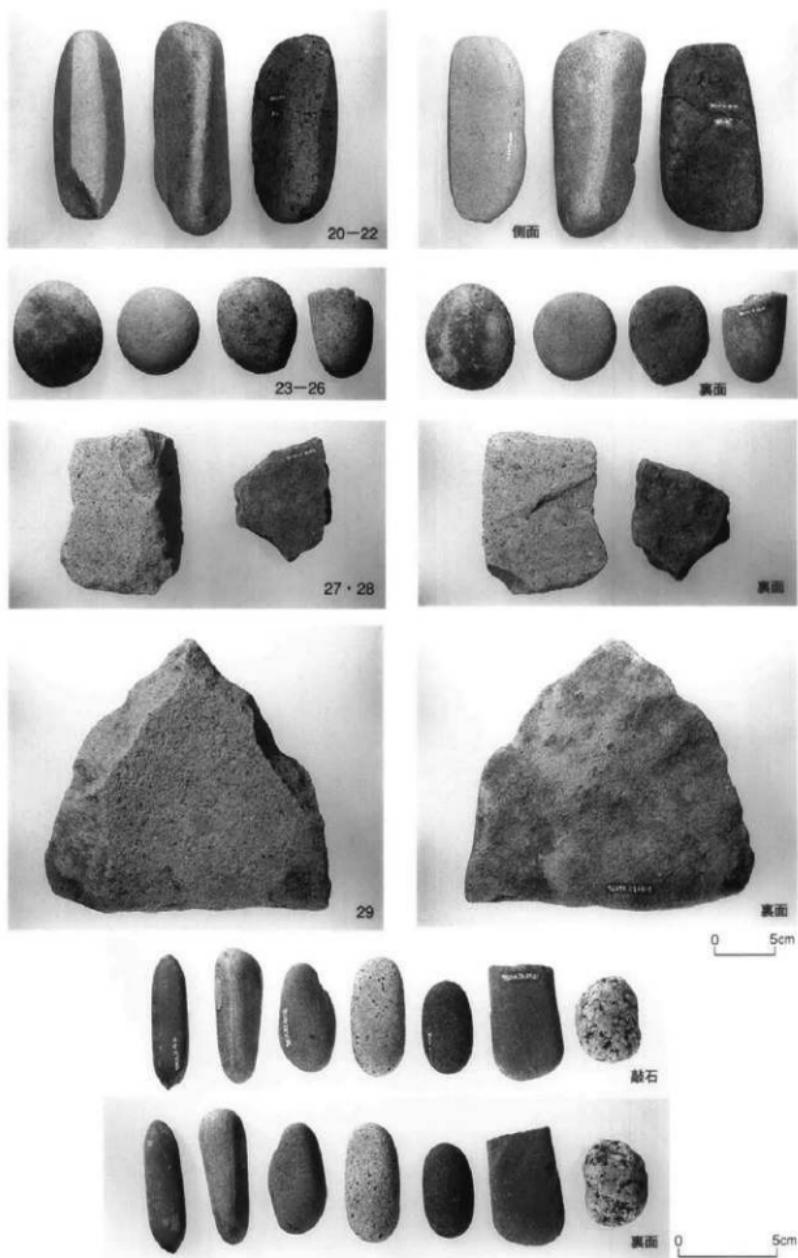
91

0 5cm

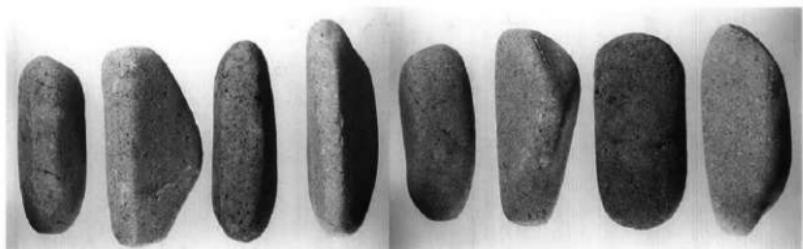
縄文土器 5 早期・条痕文系土器・その他 (72-86)、前期 (87-102)



縄文時代の石器1 石鉛・スクレイバー・クサビ形石器・石斧など

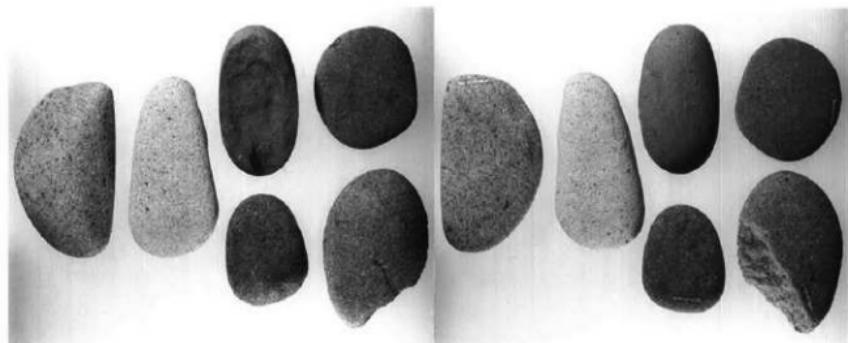


縄文時代の石器2 特殊磨石・磨石・門石・石皿・蔽石



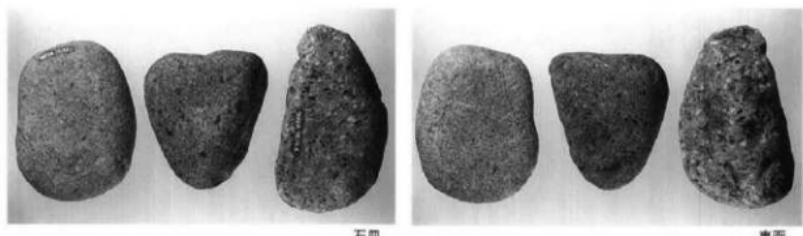
特殊磨石

側面



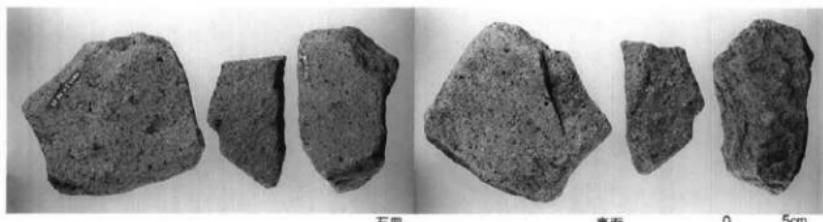
磨石（左端：特殊磨石）

裏面



石皿

裏面

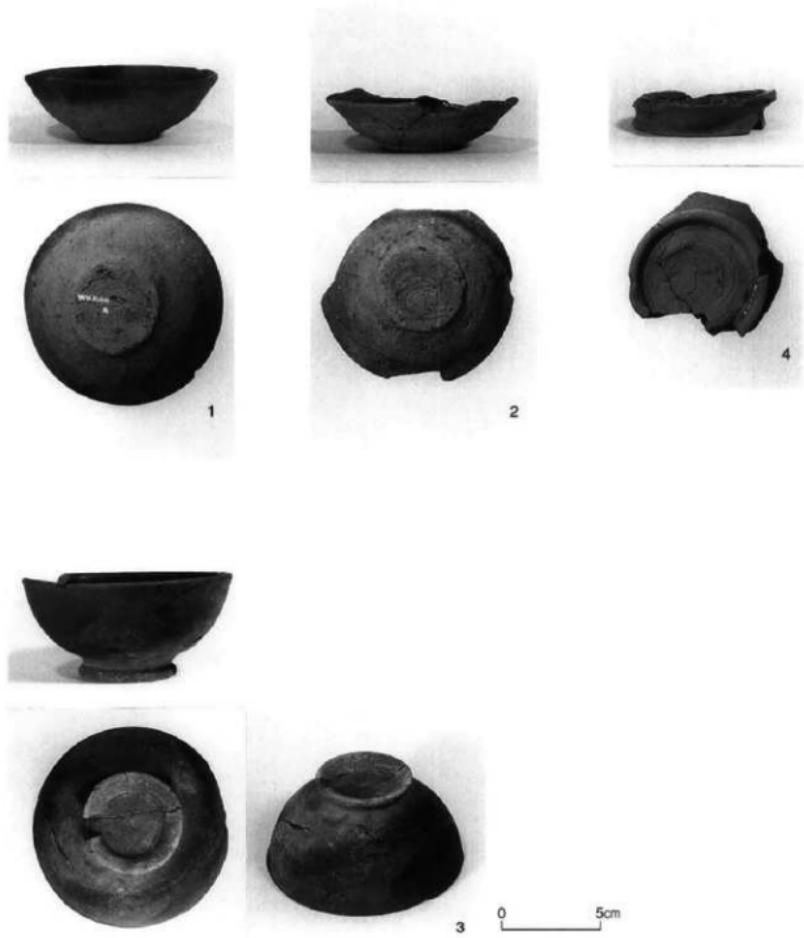


石皿

裏面

0 5cm

縄文時代の石器3 特殊磨石・磨石・石皿



平安時代の土器

SUMMARY

The Kami-yamakuwa A site is located at Yamakuwa, Nojiri, Shinano-machi, in the northern end of Nagano prefecture, Central Japan. It is situated in lat. 36° 50' 04" N., long. 138° 10' 18" E., and is 741.4 to 749.4 meters above sea level. The site is on the steep eastern slope of Kurohime Volcano. The excavation was carried out from May 11 to October 23 in 1998, by the Shinano Town Board of Education, prior to the construction of the local road, the Sugino-sawa - Kurohime station line. The total excavation area is about 2,000 square meters.

The Late Quaternary sediments are divided into 3 formations as follows; Nojiri Loam Formation, Kashiwabara Black Ash Formation, and surface soil, in ascending order.

The remains that totaled 1,459 were excavated from the cultural layer in the Kashiwabara Black Ash Formation, Holocene. There were 760 pieces of Jomon pottery, 268 pieces of lithic artifacts, 305 pieces of Heian age pottery, a piece of Taisho's coin, 27 pieces of recent pottery, and 98 pebbles and so forth.

Most of the artifacts from the Kami-yamakuwa A site belong to the Initial Jomon Period, the Early Jomon Period, and Heian Period. The results of the excavation are as follows.

1. Initial Jomon Period (about 7,000 y.B.P.)

Among the 760 fragments of pottery found, most of them belong to the middle and the later half of the Initial Jomon period.

The "Chinsen-mon pottery" (Grooved-line decoration pottery) can be divided into 3 groups; type I, type II, and a group consisting of the others. Type I pottery is characterized by shell made decoration, belonging to the later half of the Tado-upper type pottery. Type II pottery is characterized by the grooved pattern, which belongs to the time between the end of the Tado-upper type and the Shiboguchi type.

These pottery types are characteristic of the northern area of Nagano prefecture and the southern area of Niigata prefecture.

Most of the "Jokon-mon pottery" (Incised lines pottery) belongs to the Ugashimadai type pottery.

The variety of lithic tools includes arrowheads, scrapers, piece esquillee, polished stone axes, polishing stones, stones with indentations or surface pitting, saddlequerns, and hammer stones.

2. Early Jomon period (about 5,500 y.B.P.)

Most of the pottery of this period belong to the late half of the Early Jomon, consisting of Moroiso b type vessels.

3. Heian age (about 1,000 y.B.P.)

Among the 305 fragments of pottery found, most of them belong to the middle stage of the Heian age.

(NAKAMURA Yoshikatsu)

報告書抄録

書名	上山桑A遺跡発掘調査報告書							
副書名	信濃町の縄文早期・沈線文系土器の遺跡							
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財							
シリーズ番号								
編著者名	中村由克							
編集機関	信濃町教育委員会							
所在地	〒389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL: 026-255-5923							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
上山桑A	長野県上水内郡信濃町大字 山桑字高沢、上山桑	205834	54	36度 50分 04秒	138度 10分 18秒	19980511～ 19981023	2,000	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上山桑A	散布地	縄文時代 早期 前期 平安時代	なし	総出土数 縄文土器 石器 平安土器	1,459点 736点 267点 303点	縄文時代早期中葉の沈線文系土器が まとまって出土し、2段階の変遷の 様相が確認された。		

表紙写真

左 沈線文土器Ⅰ（沈線文1-b）
貝殻腹縁文が施された土器

右 沈線文土器Ⅱ（沈線文3-a）
櫛齒状工具による条線がひかれ、
刺突が施された土器

信濃町の埋蔵文化財

上山桑A遺跡発掘報告書

—信濃町の縄文早期・沈線文系土器の遺跡—

編集発行 信濃町教育委員会
長野県上水内郡信濃町柏原428-2

発行日 2004年3月31日

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〔この報告書についての連絡先〕

野尻湖ナウマンゾウ博物館
〒389-1303 長野県上水内郡信濃町野尻287-5
TEL 026-258-2090
FAX 026-258-3551

Archaeological Reports of Shinano-machi

Kami-yamakuwa Site

Excavation of a Initial Jomon Site

2004

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminochi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.